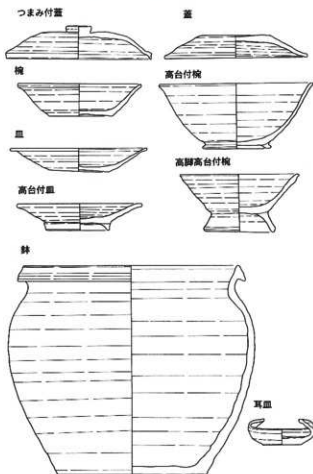


第35図 須恵器供養具の器種



きるが、住居跡内遺物等の供養遺物で、組み合わせを明瞭にできた資料はなかった。

B 杯・碗 一般的に杯と碗は、浅めで立ち上がりの緩い傾斜の器形が杯、深めで立ち上がりが急な傾斜の器形が碗とされるが、中堀遺跡から出土した同器種の一群は、杯とも碗とも判断しにくいものが多く、ここでは、碗としてデータの一括処理を行っておくこととする。中堀遺跡では、全時期を通じて普遍的に確認できる。

底部のロクロからの切り離しは、全て糸切りである。

なお10世紀の後半以降、小形の杯が登場するが、11世紀代にみられるいわゆる「小皿」とは趣が異なる。この小形の杯は、同時期の杯・碗や高台付碗・高脚高台付碗等の器形と共通し、小形の底部から緩く内湾しつつ立ち上がり、口縁部で外反している。須恵器(H

S)・須恵器(NS)のみにみられた。

C 高台付碗 高台付碗は、杯・碗に高台を付けた形態で、中堀遺跡の全時期を通じて確認することができる。底部のロクロからの切り離し調整は、糸切りが大部分であるが、若干ヘラ切り後に高台を付けた場合が確認できる。

底部の大きさによって形態が異なるものの、底部から緩く内湾しつつ立ち上がり、口縁部で外反している。底部から体部にかけては比較的厚く、口縁部の外反直前で器壁が極端に薄くなる特色がある。

高台に様々な形態が確認できたので、形態分類を行っておくこととする。高台の形態が、高台を貼付する手法の媒体であると考えられるためである。ただし中堀遺跡の土器は、9・10世紀の製品が中心のため、すでに本来の高台の成形技法が、変質していることが予測される。

まず中堀遺跡の高台は、碗部をロクロから切り離した後、基本的に切り離しの外縁に沿って、紐状の粘土を貼付し高台としている。元来、高台は、食器の器形を形作る重要な要素であるとともに、重ね焼きを円滑に行える形態である必要がある。

そこで注目すべきは、高台端部の外端か内端による接合地である。高台を貼付するすべての食器について、外端(I)か内端(II)、両者に当てはまらないもの(III)でまず分類した。

IかIIは、さらに端部の形状から高台端部が、凹んで沈線状となる(a)、面を持ち傾斜し、台形状となる(b)とした。

IIIには、Iの変形と考えられるC字形となったものがあり、内面の高台を貼り付けたナデが広く、鷲の爪状である。底部が薄く、高台の高い(a)と、底部が厚く低い高台で、厚い底部と水平となる(b)、(a)よりも立ち上がりが急で、高台の先端が丸味をおびる(c)がある。III cには、体部との接合面が広く、先端が尖る(1)、立ち上がりが比較的緩やかで、先端の丸い(2)、立ち上がりが急で、先端の丸い(3)、体部との接合面が広く、接合やナデが難なもの(4)

がある。

I a と II a は、それぞれ高台全体が、高く細い(1)と、太く低い(2)がある。

I b と II b は、細分が可能である。I b は、体部との接合面が広く、底部から緩やかに立ち上がり、外面のナデが強く、めくれるように外反する(1)、体部との接合面が狭く、高台も細く、作りの丁寧な(2)、高台が高く直立し、体部との接合面が狭い(3)、体部との接合面が広く、高台も太く、ナデ幅の広い(4)、(4)と類似するが、接合、ナデがとても雑なもの(5)がある。

II b は、高台が高く直立し、体部との接合面が狭い(1)と広い(2)、高台外面が外反し、高台が高い(3)と低い(4)、高台が低く直立し、内面のナデ幅の広い(5)、高台外面が、外へ膨らむ(6)、そしてきわめて雑な作りの(7)からなっている。

D 高脚高台付椀 それまでの高台付椀の高台が、高くても7から8mm以下であったが、10世紀前葉から1.5cm前後の高い高台の椀が出現する。この高脚高台を高台分類のIV類としておきたい。このほか極端に高い筒状の高台をしたものも確認できる。

椀部は、やはり緩やかに内湾しつつ立ち上がり、口唇部で外反している。須恵器(NS)・須恵器(HS)に確認できる。底部のロクロからの切り離しは、糸切りによる。

E 皿 皿には、高台を付けたもの(高台付皿)と付けないもの(皿)が確認できた。皿は、高さが低く、水平に近く開くものが多く、口縁部で極端に細くなり

口唇部で膨らむ。底径と口径のバランスに様々なものがある。椀類ほどではないが、一定量存在し、供道具の一翼を担っていた。

ロクロで成形した後、底部を糸切りしている。様々な高台の形態が存在し、高台付椀の高台分類に準拠した。焼成は、須恵器(S)・須恵器(HS)・須恵器(NS)がみられる。

皿は、9世紀の後半から10世紀の前葉にかけて確認できる。

F 耳皿 耳皿は、対面する口縁部の二ヶ所を内側へ折り曲げた形態である。高台を付けたもの(高台付耳皿)と付けないもの(耳皿)が確認できた。焼成は、須恵器(S)・須恵器(HS)・須恵器(NS)がみられる。出土量はきわめて少ないが、10世紀の前半に確認できた。

G 鉢 鉢は、大降りで深めの碗形のもので、素口縁のもの、口縁部が外反し「M」字状となる2種類がある。ロクロで成形した後、底部を糸切りしている。焼成は、須恵器(S)・須恵器(NS)がみられる。出土量はきわめて少ないものの、9世紀から10世紀前半に確認できる。一般に高台は付けられていない。

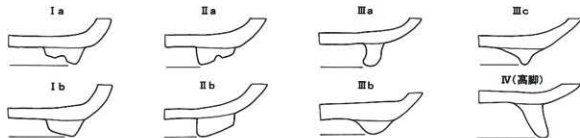
ただし高脚高台を付けた鉢が確認できるが、これは器壁が厚く、大降りで前の鉢とは異なる。焼成は、須恵器(HS)である。

また素口縁の鉢の口縁部を、一部外方に突出させた片口鉢が確認されている。

2 煮炊・貯蔵具

煮炊・貯蔵具には、甕・大甕・壺・長頸壺・短頸

第36図 高台付椀高台分類



壺・甕・羽釜・鉢・風子硯等がみられた。

A 甕・大甕 甕には、法量（容積）によって各種が存在する。

器壁を叩いて成形した様子が、器表の当て具・叩き板の痕跡から伺うことができる。甕の内面には、同心円文や無文の当て具が使用され、外面には、並行した柁目状の痕跡が残っている。甕の当て具と胎土の状態から次のような分類を行った。

a 当て具に文様あり

灰色で硬いもの	a1
白で硬いもの	a2
灰白系で軟質なもの	a3
灰白～赤系で軟質なもの（粉ボイ）	a4
肌色で石片を多く含む硬質なもの	a5
黒色粒子白色粒子多量で目立つ	a6
内面灰白で硬質なもの	a7

b 当て具に文様なし

灰色で硬いもの	b1
白で硬いもの	b2
灰白系で軟質なもの	b3
灰白～赤系で軟質なもの（粉ボイ）	b4
肌色で石片を多く含む硬質なもの	b5
黒色粒子白色粒子多量で目立つ	b6
内面灰白で硬質なもの	b7

また甕の口縁部には、波状文が施される場合があるが、中堀遺跡の甕・大甕は、資料的には少ない。口縁部と口唇部の形状で以下のように分類した。波状文について有（A）無（B）とし、色調が、灰色を（イ）白色を（ロ）とし、口唇部を揃ひものを（1）揃まなものを（2）とした。または口唇部を欠損し、口縁部に波状文を施した破片についてはCとした。

さらに底部破片を集計した。

甕・大甕には、須恵器（S）・須恵器（HS）・須恵器（NS）がみられる。

B 壺 壺には、様々な形態が確認できる。ここで分類した壺は、いわゆる壺で胴部に比較すると、口縁部が細く、甕と区別しにくいものを指す。このほか

に頸部が極端に短い短径壺は、蓋を伴う場合と伴わない場合がある。後者の場合、口縁部は外反する。

広口壺は、平底で細長い無花果状の胴部に、肩部から大きく開く口縁部が付けられる。

とくに長頸壺は変化に富み、環状の把手を付けたものもある。ほとんどの長頸壺が高台を付けるが、高台を付けないものも存在する。胴部内面にユビオサエやタタキの跡が残り、口縁部はロクロ成形されている。須恵器（S）・須恵器（HS）・須恵器（NS）がみられる。長頸壺の出土量は、一般の集落遺跡に対して高い。

また特殊な壺として凸帯付き四耳壺や「壺G」がある。凸帯付き四耳壺は、肩部に凸帯を巡らしその凸帯の4ヶ所に突起（耳）を付けた形態で、長野県に広く、しかも多く分布した土器である。壺Gは、細身の器形で、肩部がやや貼り、広口の口縁部につながっている。

C 羽釜 中堀Ⅷ期以降、土師器甕A、Bに代わり、煮炊具の中心となる器種である。

製作技法は、粘土紐巻上げで成形し、その後ロクロにより整形する。基本的には胴部中央から底部にかけて縦方向に雑にヘラケズリを施すものである。

また胎土中に多量の砂粒と角閃石を含むことを特徴とする。このような羽釜は、近年の研究により、群馬県の藤岡市、吉井町周辺で生産されていたことがわかり、「吉井型羽釜」と呼ばれているものである。

須恵器羽釜は、プロポーシオンにより2つに大別できる。

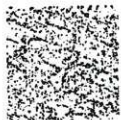
A 鈔部付近でやや強く内湾し、小さな底部に向かって急激に細くなるもの。

B 胴部中央に張りもち、樽型になるもの。

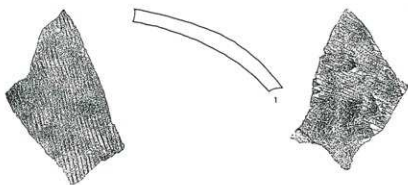
Aは、口縁部の形状からI、IIの2つに分けることができる。Iは口縁部が上に向かって外反しながら立ち上がるもので、IIは外反せずに、緩く内湾もしくは内傾するものである。

また、I・IIともに、鈔部付近で屈曲するものをa、しないものをbとするほか、胴部に形状から、胴部上位が張るものをイ、胴部中央が弱く張るものをロ、胴

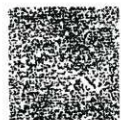
第37図 大巻・叩き目分類



平行当具



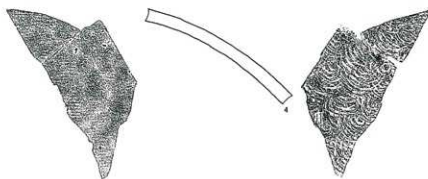
格子当具



条線当具



同心円当具



模様なし当具



部が底部に向かってあまり細くならず、寸胴になるものをひととして細分し、「須恵器羽釜AⅡaイ」などと呼ぶようにする。

Bは、胴部の形状からⅠ、Ⅱの2つに分けることができる。Ⅰは胴中位の張りが強く、球胴に近いもので、Ⅱは張りがやや弱く、長胴気味になるものである。

また、Ⅱは、口縁部が内傾するaと、口縁部が直立し全体のプロポーションが、樽型というよりも砲弾型に近くなるbに細分できる。このbのうち、口縁端部が面取り整形されておらず丸味をもつものにはイをつけて区別し、「須恵器羽釜BⅡbイ」などと呼ぶようにする。焼成は(NS)と(HS)があるが、硬質な(S)の焼き上がりになるものはない。

なお、遺物観察表の鈔に記載されている数字は、口縁端部から鈔先端までの長さである。

D 甔 中堀遺跡から出土した甔は、すべて鈔をもつもので、須恵器羽釜と同様にロクロ整形される。

甔は3つに大別できる。

A 口縁部が須恵器壺や壺と類似する形状のもので、胴部中位がやや張るⅠと、胴部から口縁部にかけてラップ状に開くⅡがある。底部の形状は不明である。

B 底部から直線的に開くもので、大きく開くⅠと小さく開くⅡがある。底部の形状は不明なものが多いが、筒抜け状になり、内面に贅子を受けるための窪みや穿孔がみられる。

C 鈔部付近で弱く屈曲し、口縁部が直立するもので、A、Bに比べて、口縁端部から鈔部までの長さが短い。底部の形状は不明であるが、くの字に開く脚部をもつものが主体となると思われる。

焼成は(NS)と(HS)がほとんどであるが、中堀Ⅴ期の第155号住居跡39の甔が1点のみ(S)である。

E ロクロ整形甔 ロクロ整形の甔が少量出土している。これらは、須恵器羽釜の普及時期に伴出するもので、胎土焼成ともに須恵器羽釜に類似する。

3 仏器系の器種

仏器系の器種としては、水瓶や鉄鉢等がみられた。水瓶は、口縁部を欠くものの、肩部の張った無花果形の胴部であり、低い高台を付設している。須恵器(S)である。

鉄鉢は、半球形の胴部で、口縁部の内屈する形態で、底部は、回転ヘラケズリによって円錐形となっている。須恵器(S)と須恵器(HS)があった。

このほか、須恵器と同様の焼成の器物に風字観や紡錘車等がみられた。

III 灰釉陶器

平安時代以降、東海地方で生産された灰釉陶器が、中堀遺跡では、周辺の集落遺跡に比較して大量に出土した。とくに9世紀後半から急増し、10世紀の前半にかけてその傾向が続いた。

ここで扱う灰釉陶器は、刷毛塗りや漬け掛けなどによって、人工的に施釉をして焼成された製品を指し、窯内の降灰等で生じた自然釉による、いわゆる「原始灰釉陶器」を含まないものとする。ただし東海地方で灰釉陶器が盛んに焼成され、灰釉陶器の技術系譜上にありながら施釉を伴わない、静岡県大須賀町の清ヶ谷窯跡群のようないわゆる「無釉の灰釉陶器」については、同列に扱うこととしたい。

中堀遺跡から出土した灰釉陶器の器種構成には、供膳具や貯蔵具の他に仏器系の器種も含まれていた。供膳具としては、蓋・高台付碗・高台付皿・段皿・耳皿が確認できた。貯蔵具としては、長頸壺・広口壺・小瓶・手付瓶・平瓶などがみられた。また仏器系の器種としては、三足盤がみられた。

なお灰釉陶器の詳細については、後述することとする。

灰釉陶器は、遺物観察表の種別にKと記述した。

IV 緑釉陶器

東海地方を始め京都府や山口県・滋賀県等で生産された緑釉陶器が、灰釉陶器以上に東国の遺跡から出土することはきわめて少ない。ところが焼き物の全体量

からすると少ないが、中堀遺跡からは、破片を含め住居跡から57点の緑釉陶器が出土した。この数値は驚異的な出土量であり、国府や国分寺の出土傾向に匹敵するといっても過言ではないであろう。

出土した器種構成をみると高台付碗が圧倒的に多く、全体の9割を占め、高台付皿や段皿がこれに続く。このほか後皿や後碗などもみられる。なお高台付碗の中には、陰刻花文を描いたものや口唇部に輪花をあしらったものもみられた。

また緑釉緑彩陶器も出土している。器種は段皿で、口縁部の内面に濃い緑色釉で対角線上に二対、計四ヶ所の花卉が描かれている。

灰釉陶器同様、緑釉陶器も詳細については、後述することとする。

なお、緑釉陶器は遺物観察表の種別ではMとしている。

V 黒色土器

土器の表面を黒色に焼き上げた黒色土器が、中堀遺跡から少量出土している。土器表面の黒色化は、内面のみ（黒色土器A類）、内外面とも（黒色土器B類）の両者が中堀遺跡ではみられる。また器種構成では、高台付碗と無台の碗、そして高台付の皿・耳皿を確認することができるが、無台の皿や無台の耳皿は確認することはできなかった。

一般的に黒色土器は、黒色処理以前に器面を細かく磨き上げているが、中堀遺跡から出土した黒色土器の中には、ミガキを伴わず、焼成のみ黒色処理したものも見受けられた。またミガキは各種存在するが、内面を底部の中心から放射状に口縁部に向かって磨いた後、口縁部内側を水平に磨いているものが一般的である。器形の成形は、ロクロ成形により作り出され、心がとれ、歪みの少ない製品が多い。

9世紀の後半から10世紀にかけてみられる。

VI 輸入陶磁器

中堀遺跡からは、中国で生産された青磁・白磁が破

片資料であるが出土している。器種は、青磁が六角台子の蓋、白磁が高台付碗である。詳細は後述したい。

中堀遺跡から出土した古代の土器について他の特色を次に列挙しておく。

A 墨書土器 墨書土器は、8世紀と比較すると9・10世紀の墨書土器は一般的に減少する傾向にある。また吉祥句や数量などを示す「一字墨書」が増加し、建物名称や役職などを示す墨書は減少するという。

中堀遺跡では、「南」「平」「床」等の墨書土器が多く確認でき、「仁」「加」「酒」などもみることができ。これらの中には、一般の墨書土器とはやや趣のことなるものが含まれており、中堀遺跡の性格付けの一つの要素となろう。

これらのはほとんどは、食膳具に墨書され、煮炊具や貯蔵具には墨書された例はなかった。また墨書の部位は、底部内外・口縁部内外等様々であるが、詳細については後述することとする。

B 油煙付着土器 土師器の坏、須恵器の碗・高台付碗などの口縁部底部から内面にかけて、油煙の付着した土器が比較的大量に出土した。ただし小破片が多く、実測図化できなかった破片は少なくなく、写真図版によってその欠を補うこととした。

油煙付着土器の中には、漆の作業工程の中で取り皿やパレットとして利用された食膳具が、油煙の付着した土器と区別付きにくいものがある。中堀遺跡からは、この漆作業に使用された土師器の坏や漆紙文書が出土しており、漆作業にかかわった人々が存在したことは確実である。

C 金付灰釉陶器 金の細粒が、内面の釉薬や器表の隙間に詰まった状態の灰釉陶器が出土した。器表は大変平滑に磨かれており、内面底部に一筆で塗られた施釉や口縁部の釉薬などは大変かせた状態になっている。

D 転用硯 中堀遺跡から出土した灰釉陶器の中には、高台内の底部外面や内面を平滑に磨き上げたいわゆる転用硯がみられる。ただし中堀遺跡から出土した

灰釉陶器の転用硯には、墨の付着の痕跡は少なく、わずかに朱墨が付着したものを確認したに過ぎなかった。また須恵器の椀や皿等の底部内外面が、平滑に磨かれたものはみられなかった。

瓦

瓦は、竪穴式住居跡からも出土した。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土しており、軒丸瓦・軒平瓦は、極力掲載し、丸瓦・平瓦は、端辺や隅部の残る拳大以上の瓦について全て報告した。

土製品

土製品としては、鉄・銅の鍛造や鋳造にかかわり、フイゴ羽口や鋳型・トリベ・円板状土製品がみられた。フイゴ羽口は、径の大きなものと小さなものが存在した。しかし完形となるものは少なく、しかも伊内の高温によって縮んでしまったものも多く、全体のわかるものは少なかった。そのため図化できたものがわずかであったため、破片資料については、写真図版で補った。

鋳型は、第122号住居跡からまとまって出土した。型面の形状から鋳型は、小形の半球形の製品や飾り金具を作るために使用されたと推定したが、具体的な製品については究明できなかった。トリベも出土している。トリベは、半球形で鉄製品や銅製品の生産に使用したらしく、鉄滓や銅滓が付着していた。

このほか銅・鉄生産とかかわると考えた円板状土製品が、同住居跡の周辺からまとまって出土した。手づくねで煎餅状につくられた円形の土製品で、表面は赤褐色に弁殻が塗られていた。多量の焼土や鉄滓・フイゴの羽口などとともに出土し、近くに小鍛冶の跡なども確認できたことから銅・鉄生産とかかわると考えた。

他に土製品として紡錘車の紡輪、土製の錘（土錘）がみられた。土錘の出土量は、県内で最も豊富である。

石製品では、腰帯の飾り具である石製の巡方と丸柄が出土した。4点出土した内2点は、同一の腰帯に付けられていた可能性があるが、他の2点は、明らかに別の腰帯に付けられていたものである。

石製品

また棹形の錘である石製の櫓が、4点出土した。上部に吊し穴を設け、角錐形に作られている。石製の櫓は、砥石と間違えやすい。中堀遺跡からは、砥石も比較的豊富に出土しており、鉄生産や鉄製品の豊富な使用量を物語っている。砥石には、小形と大形が存在し、使用目的によって異なっていたのであろう。

他に石製の紡錘車も出土した。石製の紡錘車には、文字の刻まれた刻書紡錘車もみられた。

石を利用した遺物（加工痕跡の残るもの）では、他に鍛造産にかかわる鉄床石、カマドに使用された灰炭岩や角閃石安山岩などのいわゆる切石等がみられた。

鉄製品・銅製品では、各種の製品が出土した。中堀遺跡から出土した鉄製品は、大変錆が進行し、鉄分はわずかに残存している程度である。しかしその出土量は豊富で、農具・工具・紡績具・建築材料・煮沸具等大変多岐にわたり、後に詳述した。

漆紙文書

このほか特殊な遺物として、漆紙文書が出土した。同文書は、カマドの燃焼部から出土したため、残存状況も悪く、残存部位も少なかった。

以上、中堀遺跡の出土遺物は、一般の集落遺跡から出土しない各種の遺物が出土したことや、その出土量が、豊富であったという特色を指摘できよう。

第1号住居跡（第38図）

B・C-2グリッドで確認した。第1号住居跡の周辺は、比較的遺構が疎らであり、確認は容易であった。

住居跡の形状は方形で、規模は長辺3.39m・短辺2.96m・深さ0.17mであった。カマド部分を除いて、幅約20cmの壁溝が検出した。

主軸方位はN-122°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄り検出した。第1号区画溝に経道部を切られていた。袖は明瞭に検出されなかった。

遺構の切り合い関係は、第1号区画溝より古かった。

遺物は、カマド内から土師器杯（8・10）が出土し、また住居南半分の床面からも土師器杯が出土した。

1から9は土師器の杯で、4・7は杯AⅡ類、他は

杯AN類である。2・9は内面底部、7は内面底部に黒色の附着物が確認できる。7は、油煙の痕跡と考えられる。

10は、須恵器（NS）の杯である。11から13は、土師器の甕である。11から13は、胸部上位以下が欠損している。

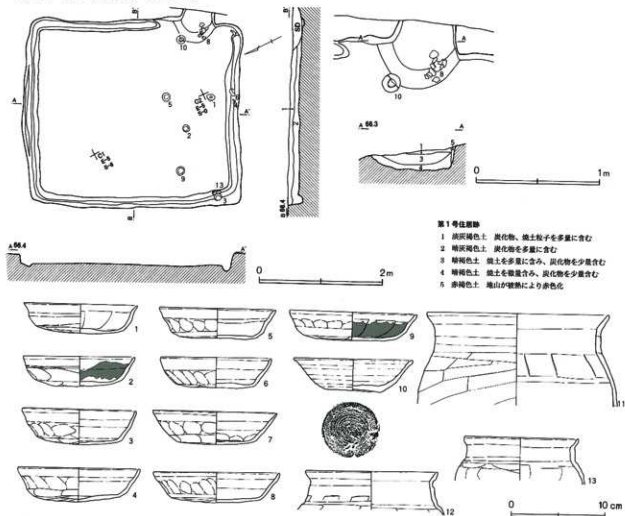
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第1号堅穴式住居跡を中壙Ⅳ期に位置付けた。

第2・3号住居跡（第39図・第40図）

C-1・2グリッドで確認した。3軒の住居跡が重複し、確認に手間取った。しかし周辺の遺構は比較的疎らであった。

第2号住居跡は、第4号住居跡に切られ、さらに住

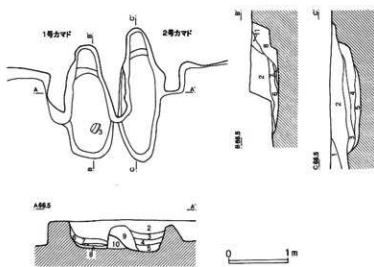
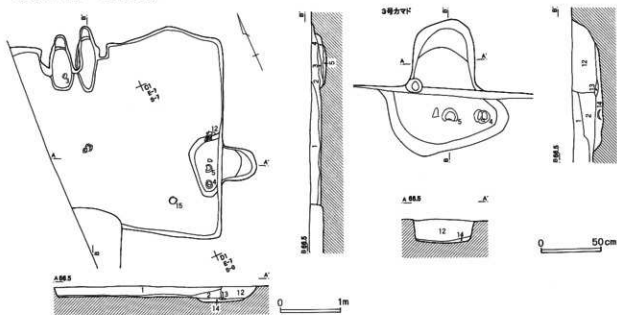
第38図 第1号住居跡・出土遺物



第12表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他				
1	坏	A	IV	H	12.0	3.1		7.7	E	良	好	淡	橙	100		
2	坏	A	IV	H	11.8	3.2		4.5	B, E	良	好	淡	橙	100		
3	坏	A	IV	H	11.8	3.7		7.7	B, E, G	良	好	淡	橙	100		
4	坏	A	II	H	12.7	3.6		7.0	R, E	不	良	明	橙	70		
5	坏	A	IV	H	12.3	3.2		8.2	B, E	良	好	淡	橙	100		
6	坏	A	IV	H	11.6	3.2		5.0	E, F	不	良	暗	灰	橙		100
7	坏	A	II	H	13.0	3.5		8.3	B, E	良	好	淡	橙	50		
8	坏	A	IV	H	13.2	3.2		8.5	B, E	良	好	淡	橙	50		
9	坏	A	IV	H	13.3	3.0		7.2	B, E	普	通	やや暗い	橙	100		
10	坏		NS		12.4	3.4		5.8	B, C, D, E, H	良	好	L	灰	橙		100
11	B	III	a	H	19.1				B, C, E	良	好	暗	赤	褐		20
12	B	III	a	H	13.8				B	普	通	暗	赤	橙		20
13	台付	壺	H		12.0				E, F, I	不	良	黑	褐	20		

第39図 第2・3号住居跡



第2・3号住居跡

- 1 二ヶ多色土 炭化物を微量含む
- 2 褐色土 炭化物を少量含む
- 3 褐色土 焼土、炭化粒子を少量含む
- 4 赤褐色土 炭化物を微量含む(焼土層)
- 5 褐色土 炭化物を微量含む、粘土ブロックを少量含む
- 6 赤褐色土 焼土を多量に含む(天井層)
- 7 黒色土 炭化物を多量に含む(灰層)
- 8 赤褐色土 焼土、炭化物を多量に含む(カマド内に堆積した埋土層)
- 9 暗褐色土 炭化物を少量含む(左袖部)
- 10 暗褐色土 焼土、炭化物を含まない
- 11 赤色土 炭化物を微量含む(天井層剥離土)
- 12 褐色土 焼土、炭化物を多量に含む、小砂利を少量含む
- 13 赤褐色土 固くしまった焼土層 天井層剥離土を含む
- 14 黒色土 炭化物層

居西側が調査区外のため全容は不明である。しかし住居跡の形状は長方形と考えられる。短辺3.33m・深さ0.19mで、主軸方位はN-116°-Eであった。

カマドは、北壁中央に2基検出された。1号カマドの左袖と2号カマドの右袖は、地山を掘り残して造られていた。共有する中央の袖を造り付けていたことからこの二つのカマドは併用されていたと考えた。両カマドとも、燃焼部は楕円形の浅い掘り込みで、煙道部に段をもって移行する。燃焼部幅が狭く、それぞれ煮炊具の一つ掛けであると思われる。

遺構の切り合い関係は、第4号住居跡よりも古く、第3号住居跡より新しかった。

遺物は、1号カマド内から土師器皿(3)が出土した。

第3号住居跡は、東壁のやや南寄りにカマドのみが検出した。主軸方位は、N-21°-Eであった。

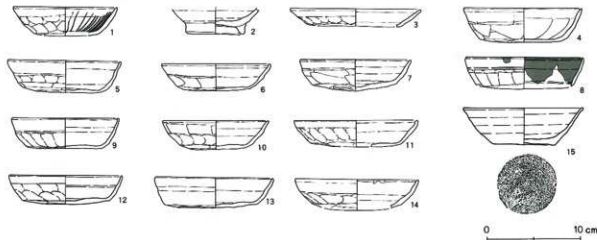
カマド燃焼部は、不整形の浅い掘り込みで、やや幅が広いことから、二つ掛けであった可能性がある。第2号住居跡の構築時の12層で埋められたと思われる。

遺構の切り合い関係は、第2・4号住居跡より古かった。

遺物は、燃焼部内から土師器杯(4・5)が出土した。

1から3は、第2号住居跡、4から15は、第3号住

第40図 第2・3号住居跡出土遺物



第13表 第2・3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	跨	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他	
1	杯(甞文)	H	10.9	3.1		6.8	B, E	良	好	橙	10		
2	高台付碗	H S				5.8	B, E, I	普	通	橙	20		
3	皿	B	13.8	1.8		9.5	B, E, G	良	好	白っぽい橙	20		
4	杯 A I	H	12.4	3.5		7.0	B, D, E	不	良	暗	橙	80	
5	杯 A II	H	11.9	3.4		7.1	B, E, F	良	好	橙	80		
6	杯 A I	H	11.5	2.9		7.1	B, E	良	好	明るい橙	60		
7	杯 A II	H	11.7	3.3		6.3	B, D, E	普	通	赤	橙	100	
8	杯 A	II	12.4				B, E, H	普	通	橙	30		
9	杯 A IV	H	11.3	3.2		7.0	B, E	良	好	淡	橙	30	
10	杯 A IV	H	11.1	3.1		5.8	B, E	不	良	暗	黄	30	
11	皿 B	IV	13.1	2.8		6.6	B, E	良	好	黄	橙	30	
12	杯 A IV	H	11.9	3.0		9.2	E, F	不	良	淡	橙	80	
13	杯 A	H	12.9	4.1		7.1	C, E, F, G, I, K	良	好	R 淡黄	橙	20	
14	杯 A	H	13.0				B, D, E	良	好	明	橙	30	
15	杯	II S	12.8	3.9		6.6	B, C, E	普	通	L 浅黄	黄	60	

居跡からの遺物である。

1は、暗文土器の坏Aである。2は、須恵器(HS)の高台付椀である。3は、皿Bである。4から14は、土師器坏で、4・6が坏AⅠ、5・7が坏AⅡ、9・10・12が坏AⅣ、そして8・13・14は、底部が不明確だが、坏Aと考えられる。11は、皿BⅣである。15は、須恵器(HS)の坏である。2は口縁部、3・8・11・14は底部が欠損している。6は内面底部、8は外面口縁部と内面体部、14は内面口縁部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

なお、第2・3号住居跡は、本来、1軒の住居跡でカマドの付け替えと考えられるが、ここでは2軒として報告する。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第2・3号

竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第4号住居跡(第41図)

C・D-1・2グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らである。住居跡の大半が調査区外のため、形状はわからなかった。残存部の深さは0.19mであった。主軸方位は、N-122°-Eであった。

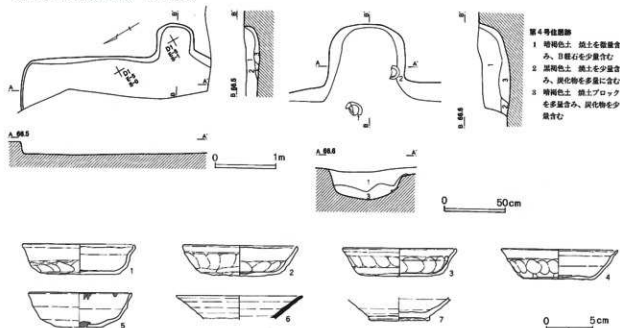
カマドは東壁に確認された。燃烧部の掘り込みは検出されず、袖も不明である。

遺構の切り合い関係は、第2号住居跡より新しかった。

遺物は、土師器坏(1・2)が燃烧部内から出土した。

1から5は、土師器の坏である。1・2は、坏AⅡ

第41図 第4号住居跡・出土遺物



第14表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	AⅡ	H	11.8	3.2	8.5	B, E	不良		灰 黒	90	カマド
2	坏	AⅡ	H	12.1	3.2	8.5	B, E	普通		淡 橙	50	カマド
3	坏	AⅣ	H	11.9	3.0	8.6	B, E	良好		暗 橙	80	
4	坏	AⅣ	H	12.2	3.1	7.6	B, E	良好		黄 橙	50	
5	坏	A	H	10.8	3.7	5.1	B, D, E	不良		黄 橙	30	
6	高台付椀	S		13.4			B, E, G	良好	L	青 灰 濁	15	
7	高台付椀	HS			6.0		B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	20	

である。3・4は、坏AⅣである。5は、不明確ながら坏Aとしておく。6・7は、高台付椀である。5・6は底部、7は口縁が欠損している。6は、内面口縁部と底部に黒色の付着物の確認できる。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第4号壑穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第5号住居跡（第42図・第43図）

E-2グリッドで確認した。周辺は小穴が多いが、

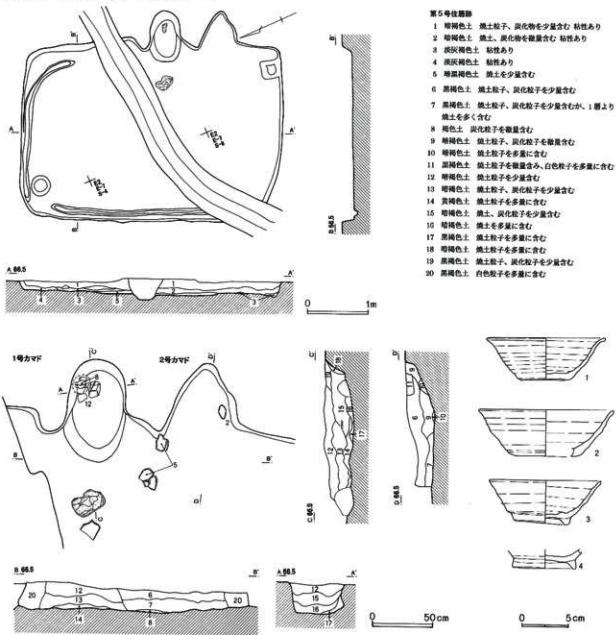
覆土上面に焼土がみられたため、比較的容易に確認できた。

住居跡の形状は長方形で、長辺4.17m・短辺2.91m・深さ0.27mであった。西壁および北壁に幅約0.2mの壁溝が検出した。住居内には、北西隅と南東隅に、二基の小穴が検出されたが、位置的にも柱穴とは考えがたい。

主軸方位はN-108°-Eであった。

カマドは、東壁に二基が検出した。断面図では、2

第42図 第5号住居跡・出土遺物（1）

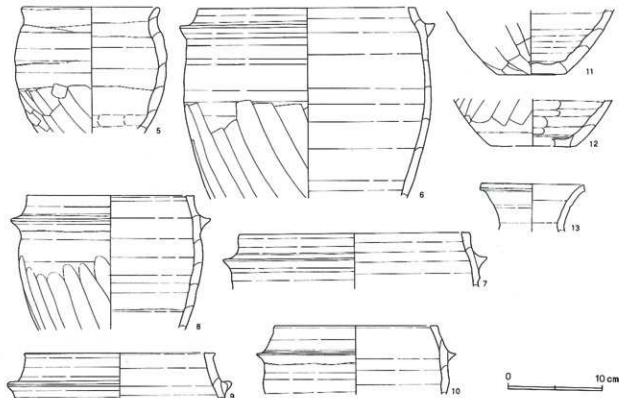


号カマドが1号カマドを切っているが、遺物の出土状況や覆土の状態から両者は、併用されていたと考えたい。袖は、1・2号ともに黒褐色土で構築されていた。1号カマドは、燃焼部に楕円形の極く浅い掘り込みがあった。また燃焼部奥に支脚と思われる川原石が残っていた。支脚は、やや左に寄っていることから、二つ

掛けと考えたい。2号カマドには、燃焼部の掘り込みがみられず、煙道部にやや傾斜しながら移行していた。1号カマド前面には、構築材として使用された川原石が出土した。

遺構の切り合い関係は、中世の溝、中世第1号掘立柱建物跡より古かった。

第43図 第5号住居跡出土遺物(2)



第15表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	碗	HS	123	4.5		5.0	B, D, E, H	良好	R	灰白	50	
2	碗	HS	141	4.9		6.0	B, C, E, H	良好	R	淡黄	30	カマド
3	高台付碗	HS	11.7	4.7		5.3	B, E, G	普通		にぶい黄橙	80	カマド
4	高台付碗	NS				6.4	B, E, H	良好	R	灰白	100	底部
5	ロクロ甕	H	143				A, B, C, E, I	良好		外-明赤褐 内-褐	50	カマド
6	羽A I b口	NS	23.0		1.9		A, B, D, E, G	良好		外-灰褐 内-淡黄褐	25	カマド南
7	羽A II b口	NS	24.4		2.8		A, B, D, I	良好		灰	15	
8	羽A II a口	NS	17.8		2.6		A, B, D, I	良好		灰褐	30	カマド
9	羽A I口	NS	20.0		3.3		A, B, D, G	良好		明褐	15	
10	羽A II a口	HS	17.0		3.1		A, B, C, D, G	良好		明赤褐	15	カマド南
11	羽底部	HS				7.1	B, G, K	良好		外-明赤褐 内-黒	100	カマド南。
12	羽底部	NS				9.0	A, B, D, I	良好		灰	40	カマド
13	壺口縁	NS	10.8				B, E, K	不良		灰白	20	カマド南。

遺物は、1号カマドの燃焼部左壁よりから羽釜(8・12)が、2号カマドの燃焼部から須恵器環が出土し、1・2号カマドの間からロクロ整形の小形甕(5)が出土した。

1・2は、須恵器(HS)の無台碗である。3は、須恵器(HS)の高台付碗で、4は、須恵器(NS)の高台付碗である。2は、底部が欠損している。4は、底部のみである。

5は、土師器のロクロ整形の小形甕である。6から12は、須恵器(10・11はHS、他はNS)の羽釜である。11・12は、羽釜の底部である。13は、須恵器(NS)の小形の甕の口縁部である。5は底部、6・8は

胴部下位以下、7・9・10は胴部上位以下が欠損している。

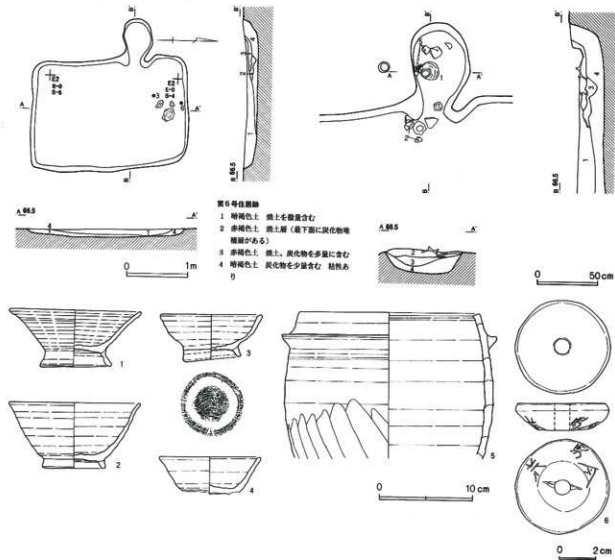
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第5号竪穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けた。

第6号住居跡(第44図)

E-1・2グリッドで確認した。周辺は小穴や土坑などの遺構が密で、確認に手間取った。

住居の形状は長方形で、規模は長辺2.49m・短辺1.73m・深さ0.13mと非常に小さい。主軸方位は、N-90°-Wであり、中堀遺跡では、2例しかない西カマドである。

第44図 第6号住居跡・出土遺物



第16表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高脚台碗	NS	13.8	6.1	7.2		普通		灰黄	100	
2	高台付碗	HS	13.9	6.9	6.1		普通		にぶい黄	60	
3	高台付碗	H	10.7	5.0	5.8		良好		にぶい黄	50	
4	高台付碗	H S	10.7			B, E, G, I	良好	R	黒褐	95	
5	羽 B II a	NS	19.2		2.5		普通		灰白	50	

カマドは、西壁やや北寄りに検出した。中堀遺跡では、カマドの焚き口部が狭い形跡は特殊である。燃焼部は、すべて竪穴外に造られる。燃焼部左寄りには高台付碗が伏せられた状態で出土した。

遺構の切り合い関係は、第1号溝より新しかった。

遺物は、「荒馬□(令か今)」と読める文字を線刻した滑石製の紡錘車(6)が、北壁中央から出土した。

1から4は、須恵器(1はNS、他はHS)の高台付碗である。1は、高脚高台付碗である。5は、須恵器(NS)の羽釜である。4は高台、5は胴部下位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第6号竪穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けたい。

第7号住居跡(第45図)

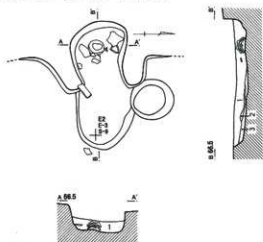
E-1・2グリッドで確認した。遺構確認の作業中に、カマドのみが検出された。遺構確認面が、床面に相当すると考えた。

カマドは、地山を掘り残し袖を造る。右袖の先端には、袖石の抜き取り痕跡と思われる円形の窪みがみられた。燃焼部から焚き口部にかけては、楕円形の浅い掘り込みがみられた。燃焼部のほぼ中央から、須恵器の高台付碗などが、口縁部を下にして三枚重ねた状態で出土した。

第17表 第7号住居跡出土遺物観察表

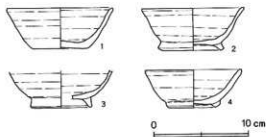
番号	器種	種別	口径	器高	胴底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	碗	NS	11.1	4.2	5.9	B, E, I	普通	L	灰黄	50	カマド
2	高台付碗	HS	10.8	4.4	6.4	B, E, I	普通	R	にぶい黄	100	
3	高脚高台付碗	HS			6.1	B, E, I	普通	L	にぶい黄	100	カマド
4	高台付碗	HS	10.1	4.0	4.9	B, E	普通	R	にぶい黄	100	

第45図 第7号住居跡・出土遺物



第7号住居跡

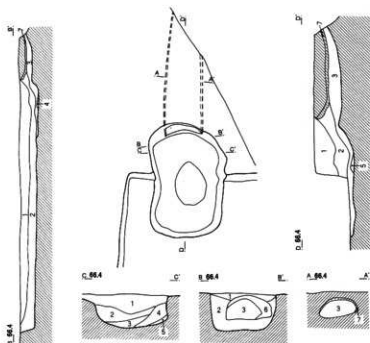
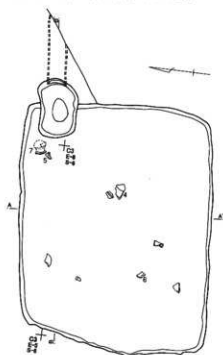
- 1 暗褐色土 炭土粒子を少量含む 粘りあり
 2 暗褐色土 炭土粒子を多量に含む(大井御前遺跡)
 3 暗褐色土 炭化物を多量に含む(豊後御前遺跡)



遺構の切り合い関係は、中世の溝より古かった。

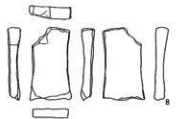
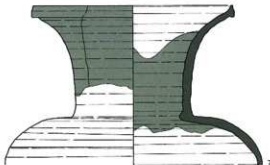
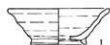
1は、須恵器(NS)の碗、2から4は、須恵器(HS)の高台付碗である。3は、口縁部と底部が欠損している。

第46図 第8号住居跡・出土遺物



第8号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘粒あり
- 2 暗褐色土 焼土粒子を細碎り状に含む
- 3 赤褐色土 焼土を多量に含む (天井板崩落土)
- 4 灰褐色土 炭化物層
- 5 灰黄褐色土 焼土、炭化物を少量含む (壁穴掘削時に堆積した層)
- 6 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 7 赤色土 堆山が凝結により赤色化



以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第7号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けた。

第8号住居跡 (第46図)

C-3グリッドで確認した。第9・10号住居跡と重複し確認されたが、他の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺3.93m・短辺3.05m・深さ0.13mであった。

主軸方位は、N-85°-Eであった。

カマドは、東壁の北東隅寄りに検出した。

袖は、検出されなかった。燃焼部の床面には、隅丸方形の浅い掘り込みがあり、煙道部は、段をもって移行していた。煙道部の先端は、中世の溝に切られ不明ながらも、残りは良好で、地山をトンネル状に掘り抜いていた。

遺構の切り合い関係は、第9号住居跡より新しかった。

カマド前面から、羽釜(5)と灰釉陶器の壺(7)が出土した。

1・2は、須恵器(HS)の高台付椀である。3は、灰釉陶器の高台付椀である。4・5は、須恵器(HS)の羽釜である。6は、土師器の甕の底部か。7は、灰釉陶器の広口長頸壺である。口縁部から頸部にかけて、内外面に刷毛塗りがみられる。1は底部、2は口縁部と高台、3は口縁部と底部、4は胴部下位以下、5は胴部中央以下、

7は胴部上位以下が欠損している。

8は、砥石である。

9は、棒状鉄製品である。

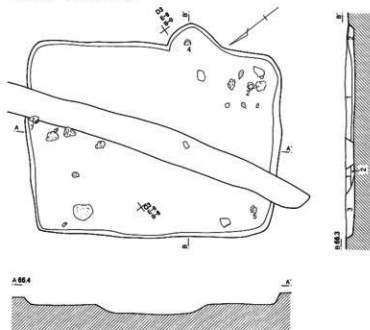
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第8号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けた。

第9号住居跡 (第47図・第48図)

C・D-3グリッドで確認した。第8・10号住居跡と重複し確認された。覆土上面が、確認面と同様の黒色土であったため確認に手間取った。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺2.47m・短辺

第47図 第9号住居跡



第9号住居跡

- 1 黒褐色土 黒土粒子、炭化粒子を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 2 暗褐色土 黒土粒子、炭化粒子、白色粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 1層に広がるが黒土の混入がやや多い

0 2m

第18表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	口径	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	10.9	3.8		5.6	B, E, I	普 通	L	にぶい褐	20	
2	高台付椀	HS				5.8	B, C, E	良 好	R	明 澄	70	底のみ
3	高台付椀	K				7.5		良 好		淡 灰	10	ただし転用説
4	甕	C	HS	26.2		3.6	B, C, D, I	良 好		外-明赤褐 内-明褐	15	
5	羽釜	B II a	HS	15.9		2.3	A, B, C, D, I	良 好		明 灰 褐	20	
6	壺底部	H				4.1	C, E, I, K	良 好		明 褐	80	
7	長頸壺	K	21.2				B			緑 灰	20	口縁部のみ

2.94m・深さ0.34mであった。

主軸方位は、N-128°Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。住居内には、カマドの構築材と考えられる拳大から人頭大の川原石が散乱していた。また住居の覆土とカマドの覆土には差が少なく、カマドは住居埋没以前に壊れていたと考えた。

遺構の切り合い関係は、第8号住居跡、中世の溝より古かった。

カマドの燃焼部内から黒色土器(4)が出土した。

1は、須恵器(HS)、2は、須恵器(S)の高脚高台付椀である。3は、須恵器(HS)の高台付椀である。4は、内面に丁寧なヘラミガキと、黒色処理を施した高台付椀である。5は、灰釉陶器の高台付椀である。1は底部と高台、2は口縁部と高台、3・4・

5は口縁部が欠損している。

6は、須恵器(NS)の羽釜である。7は、土師器の甕の底部である。8は、灰釉陶器の長頸壺である。9は、平瓦である。6は、胴部上位以下が欠損している。8は、底部のみである。

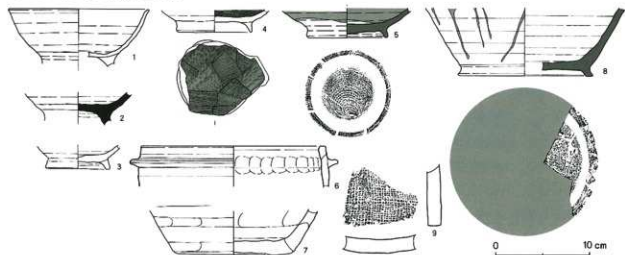
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第9号竪穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けたい。

第10号住居跡(第49図・第50図)

C-4グリッドで確認した。第8・9号住居跡と重複し確認された。

住居跡の形状は方形で、中世の溝に北西隅を切られる。規模は、長辺3.98m・短辺3.50m・深さ0.23mである。階段状の幅0.3mの高まりが、カマド部分を除く東壁の中央から南壁にかけ検出した。

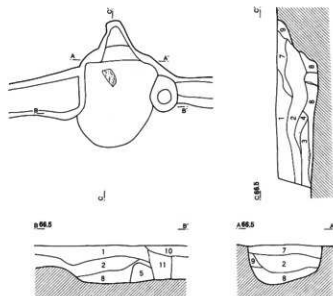
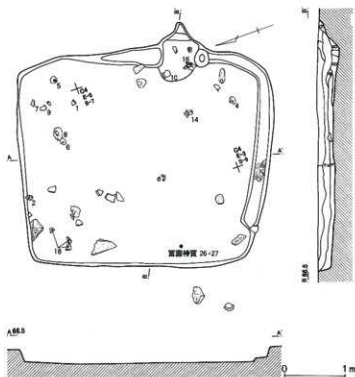
第48図 第9号住居跡出土遺物



第19表 第9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高脚高台付椀	HS	14.8				B, C, E, K	良好	R	明赤褐 外-明赤褐 内-褐	30	
2	高脚高台付椀	S					B, C, E, G	良好	R	外-明赤褐 内-褐	100	
3	高台付椀	HS				6.8	B, C, D, E	良好	R	明灰褐	60	
4	高台付椀	黒色				7.7	B, E, H	良好	R	外-淡褐色 内-灰白色	80	
5	高台付椀	K				8.2	B	良好		灰色	30	
6	羽釜	B II b	19.2		1.8		B, C, I	良好		外-灰褐 内-暗灰褐	20	
7	甕底部	H				13.0	B, C, D, E, G, K	良好		明赤褐	100	底部のみ
8	長頸壺	K				13.9		良好				底部のみ

第49図 第10号住居跡



第10号住居跡

- 1 褐色土 炭化物を多量に含み、砂粒を少量含む
- 2 淡褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘粒あり
- 3 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘粒あり
- 4 黄褐色土 焼土粒子、炭化物を多量に含む
- 5 褐色土 焼土ブロックを少量含む
- 6 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を多量に含む
- 7 黄褐色土 焼土粒子を少量含む
- 8 黒褐色土 4層に似るが焼土を多く含む
- 9 赤色土 焼土層
- 10 灰褐色土 目録石を多量に含む
- 11 灰褐色土 焼土を少量含む、目録石を多量に含む

主軸方位は、N-118°-Eであった。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに検出した。袖は、褐色土による造り付けたと考えたが、明瞭に確認できなかった。燃焼部は、円形の極く浅い窪みがあった。川原石の支脚が、燃焼部内のやや左寄りから出土したことから、二つ掛けと考えたい。

遺構の切り合いは、みられなかった。

覆土中より大量の炭化物(材)が出土し、いわゆる焼失住居跡と考えられる。

遺物は、カマド燃焼部内から、高台付椀(10)、土師器甕(16)が出土した。そのほか、北東隅付近に坏が多く出土し、カマドの前面から灰釉陶器の手付瓶(14)が出土した。また、富壽神寶(26・27)が二枚重なった状態で西壁南寄りから出土した。

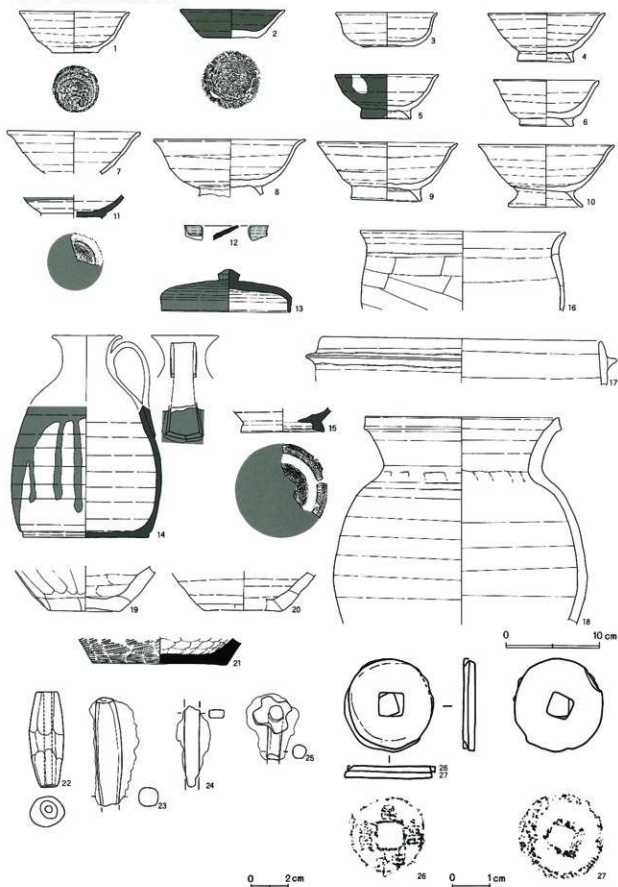
1・2は、須恵器(HS)の坏である。

3は、須恵器(HS)の椀である。4から7は、須恵器(HS)の高台付椀である。8から10は、須恵器(HS)の高脚高台付椀である。11は、灰釉陶器の高台付椀である。12は、緑釉陶器の高台付皿である。7は底部、11は口縁部・底部・高台が欠損している。12は、口縁部破片である。2は、全体に漆が確認できる。5は、外面口縁部から高台にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

13は、灰釉陶器の有蓋短頸壺の蓋である。外面に丁寧に施釉されている。14は、灰釉陶器の手付瓶で胴部上半の施釉が下方へ向かい垂れている。15は、灰釉陶器の小形の長頸壺の底部である。14は、肩部以上が欠損している。

16は、土師器の甕である。17は、土師器の羽釜である。18は、土師器のロクロ甕である。19は須恵器(NS)、20は土師器のそれぞれ羽釜の底部である。21は、須恵器(S)

第50图 第10号住居跡出土遺物



第20表 第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏	HS	11.6	4.3		4.9	B, E, I	良好	L	にぶい 橙	90	
2	坏	HS	11.0	2.9		6.0	B, E, G, I	普通	R	灰 黄 褐	95	
3	碗	HS	10.6	3.6		5.5	B, E, G, I	普通	R	にぶい 橙	80	
4	高台付碗	HS	12.2	5.1		5.8	B, E, G, I	良好	R	にぶい 橙	80	
5	高台付碗	HS	10.9	4.6		5.2	B, I	良好	L	橙	70	
6	高台付碗	HS	11.0	4.8		5.4	B, E, H	良好	L	淡 黄 褐	100	
7	高台付碗	HS	14.0				B, E, G, I	普通	L	にぶい 橙	20	
8	高脚高台付碗	HS	16.0				B, E, I	良好	R	橙	90	
9	高脚高台付碗	HS	14.8	6.2		7.3	B, E, I	普通	L	橙	90	
10	高脚高台付碗	HS	14.3	6.5		7.7	B, E, I	良好	L	橙	80	
11	高台付碗	K					D	良好		淡 灰	10	
12	高台付皿	M					B	良好		淡 緑		
13	短頸壺	K	13.5	4.4			D	良好		淡 黄 緑	80	
14	手付瓶	K	7.1	20.8		13.4	D	良好		淡 灰 白	40	胴部上半欠損
15	長頸壺	K				8.7	C, D	良好		灰 褐	10	破片
16	A IV b	H	21.7				E, H	良好		淡 橙	20	
17	土師羽釜 A	H	29.4		2.0		B, E, H	良好		浅 黄 橙	5	
18	ロクロ甕	H	20.6				D	普通		赤味がかった橙	30	胴上半のみ
19	羽底部	NS				7.6	B, E	良好		白	25	
20	羽底部	H				8.3	B, C, E, K	良好		暗 赤 褐	25	
21	甕	S				14.1	G	良好		暗 黒 褐	10	底部のみ

第21表 第10号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
22	黄 橙	100	5	1.9	0.4	14.6	C 1	I a	110	

の甕の底部である。16は胴部中位以下、17は胴部上位以下、18は胴部下位以下が欠損している。

22は、土錘である。23から25は、鉄製品である。23・24は棒状鉄製品、25は座金具のついた釘と考えられる。26・27は、ともに富壽神寶（初唐年818年）である。

以上、出土遺物から第10号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第11号住居跡（第51図）

D-3、E-3・4グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであり、確認は容易であった。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺3.73m・短辺2.54m・深さ0.23mであった。

主軸方位は、N-114°-Eであった。

カマドは、検出されなかった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

馬歯が西壁中央付近で出土した。

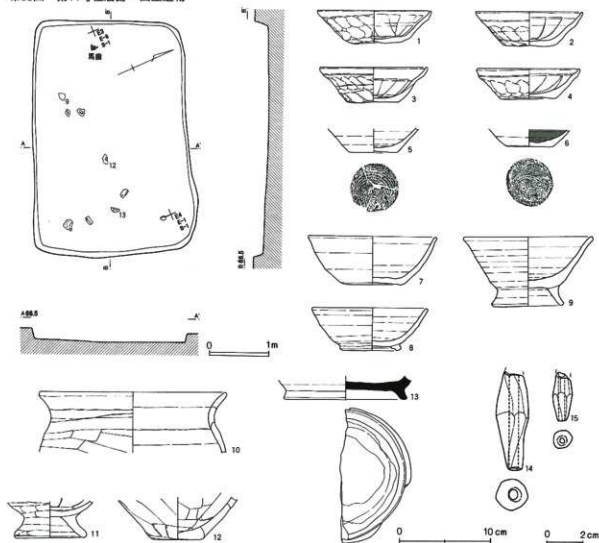
1から4は、土師器の坏B Vである。5は須恵器(H S)、6は須恵器(NS)の坏である。7は、須恵器(H S)の大形の碗である。8は、須恵器(NS)の高台付碗である。9は、須恵器(NS)の高脚高台付碗である。5・6は、底部のみである。6は、内面の黒色処理が施されている。

10は、土師器の甕である。11は、土師器台付甕の脚部である。12は、須恵器(NS)の羽釜の底部である。13は、須恵器(S)の長頸壺の底部である。底部外面に墨痕が付いている。10は、胴部上位以下が欠損している。

14・15は、土錘である。

以上、出土遺物から第11号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第51図 第11号住居跡・出土遺物



第22表 第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他	
1	坏	B V	H	12.2	3.6	5.3	D, E, F	良好		淡白	橙	40	
2	坏	B V	H	11.5	3.7	5.3	B, D, E	普通		淡白	橙	40	
3	坏	B V	H	11.5	4.8	5.6	B, E, F	不良		淡	橙	30	
4	坏	B V	H	11.1	3.2	6	B, E, K	良好		暗	橙	70	
5	坏	HS				5.1	B, E, H, I	良好	R	外 - 暗 内 - 淡	褐 橙	100	底部のみ
6	坏	H				5.2	B, E, H	良好	R	外 - 淡 内と底部 外面 - 黒	褐 橙	100	底部のみ
7	大高台付	碗	HS	13.9	5.1	5.9	B, E, H	良好	L	淡	橙	20	
8	高台付	碗	NS	12.9	4.5	5.6	B, E	良好	R	灰	白	70	
9	高脚高台付	碗	NS	13.7	7.3	7.5	B, D, G, H	良好	R	灰	白	70	
10	壺	A III b	H	20.1			C, E, H	良好		淡	橙	20	
11	台付	壺底部	H			7.5	B, E, H	良好		淡	橙	70	
12	羽	底部	NS			5.5	E, H	良好		暗	赤 褐	100	底部のみ
13	壺	底部	S			13	B, E, H	良好		灰		50	

第23表 第11号住居跡出土土鐘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
14	浅黄	75		1.8	0.5	10.7	C 1	I b	109	
15	ぶい橙	50		1.0	0.3	2.0	C 2	II b	377	

第12号住居跡 (第52図)

F・G-3グリッドで確認した。周辺は、中世の建物群や小穴・土壌などの遺構が密集し、確認には非常に手間取った。遺構の重複が激しく、また南側は調査区外となるため、カマドの一部と東壁を検出しただけで、形状など不明な点が多い。

主軸方位は、N-5°-Eであった。

カマドは北壁で検出した。

遺構の切り合い関係は、中世第9・10号竪穴状遺構、

第13号住居跡より古かった。

遺物は、全て覆土中からの出土である。

1は、須恵器(NS)の高台付碗である。2は、灰釉陶器の高台付皿である。3は、土師器の甕である。2は口縁部、3は胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第12号竪穴式住居跡を中瀬Ⅵ期に位置付けたい。

第13号住居跡 (第53図・第54図・第55図)

F・G-3グリッドで確認した。周辺は、中世の建物群や小穴・土壌などの遺構が密集し、確認に手間取った。

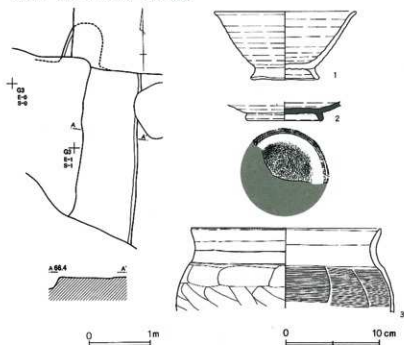
住居跡の形状は、長方形で、規模は長辺4.77m・短辺3.60m・深さ0.39mであった。

主軸方位は、N-117°-Eであった。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに検出した。袖は、褐色土によって造り付けられていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。段をもってトンネル状の煙道に移行していた。燃焼部中央には、支脚の抜き取り痕跡らしき窪みがみられ、一つ掛けカマドと考えたい。また燃焼部内から、カマド構築材の川原石が出土した。

カマド右脇で住居あとの南東隅には、貯蔵穴が検出された。長径1.39m・短径1.0m・床面からの深

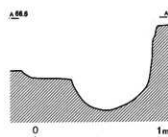
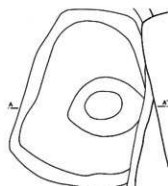
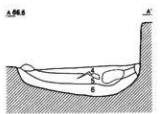
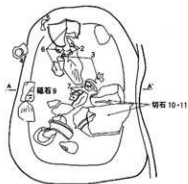
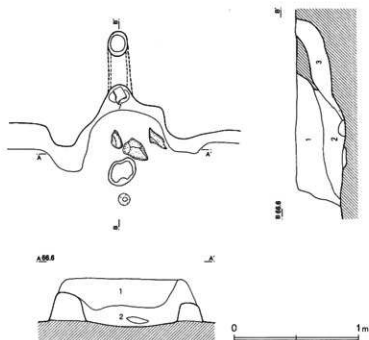
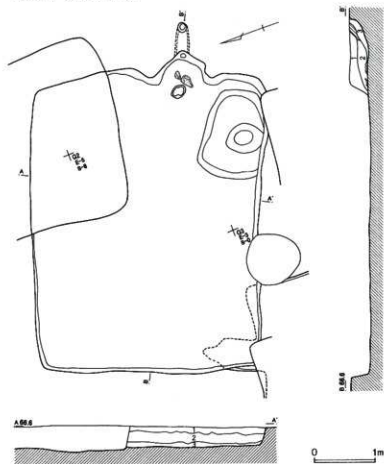
第52図 第12号住居跡・出土遺物



第24表 第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴径	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	NS	14.9	7.1		6.6	B, E, I	良好	R	灰白	40	
2	高台付皿	K				7.7	D	良好		淡灰	20	
3	甕 B III a	H	20.0				B, E	良好		明橙	10	口縁部のみ

第53図 第13号住居跡



第13号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を微量含む 固くしまっている
- 2 褐色土 焼土粒子、炭化物を多量に含む 遺物を多量に含む
- 3 黒色土 炭化物を多量に含む(床面の敷きものが炭化したもの)
- 4 暗赤褐色土 焼土、炭を多量に含む
- 5 暗赤褐色土 焼土を少量含む、炭を微量含む
- 6 暗黄褐色土 焼土、白色粒子を少量含む

さ0.22mの不整長方形であった。

遺構の切り合い関係は、中世第6号竪穴状遺構、第18号掘立柱建物跡より古く、第12号住居跡より新しかった。

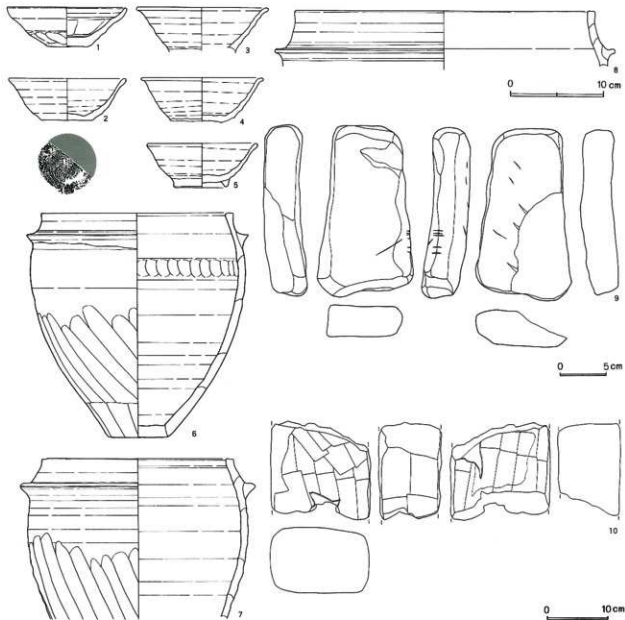
遺物は、貯蔵穴内から羽釜(6・7)や切石(10・11)、砥石(9)などが多く出土した。羽釜(7)は、カマド内の破片と接合した。また切石は、カマドの袖の補強材として使用されていた。これらの遺物は、カマド解体による廃材と考えられる。

1は、土師器の坏BVである。2は、須恵器(NS)の碗である。3・4は、須恵器(NS)の高台付碗である。5は、須恵器(HS)の高台付碗である。3は底部と高台、4は高台が欠損している。

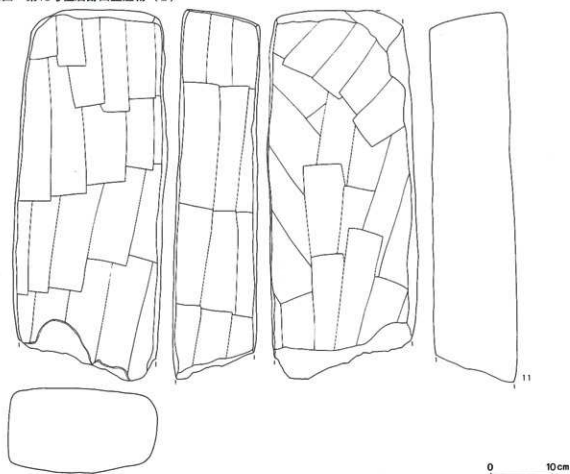
6から8は、須恵器(NS)の羽釜である。9は、砥石である。10・11は、凝灰岩の切石である。7は胴部下位以下、8は胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第13号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第54図 第13号住居跡出土遺物(1)



第55図 第13号住居跡出土遺物(2)



第25表 第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他	
1	坏	B V	H	125	4.2	4.3	B, E	普通		淡	橙	30	
2	碗	NS		124	4.4	5.5	B, E, G	良好	R	にぶい黄	橙	40	
3	高台付碗	NS		13.5			B, E, I	普通	L	褐	灰	20	
4	高台付碗	NS		126			B, E, I	良好	R	灰	白	60	
5	高台付碗	HS		11.5	4.6	5.2	B, E, G, I	普通	R	にぶい黄	橙	90	
6	羽A II a i	NS		20.4	2.4		A, B, C, D, G, I	良好		灰	褐	80	
7	羽A I a i	NS		19.9	2.8		A, B, C, D, E, G	良好		灰	白	80	
8	羽A I b	NS		31.7	4.2		B, C, D, I	良好		灰	白	20	

第14号住居跡 (第56図)

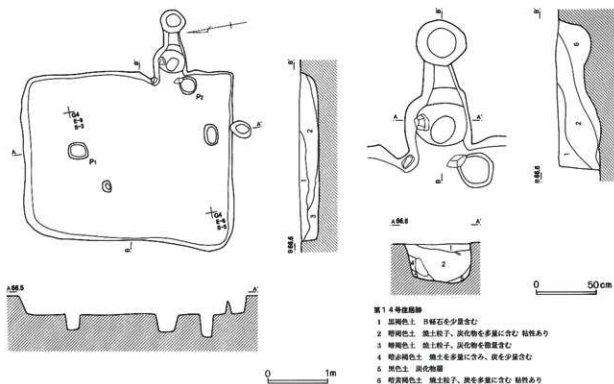
G-4グリッドで確認した。周辺は、小穴や土塊が密集し、確認に手間取ったが、覆土上面の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は、方形で、規模は長辺3.38m・短辺3.27m・深さ0.38mである。床面に小穴が三基検出され、長径方向に並ぶP1、P2が柱穴と考えられる。

主軸方位は、N-102°-Eであった。

カマドは、東壁の中央南寄りに検出した。袖は短く、地山を掘り残して構築していた。両袖の先端部分から、補強材として使用された川原石が出土した。燃焼部は、浅い窪みかみられ、段をもって短い煙道に移行していた。煙出し部は、煙道の長さと比較し、大きく、やや深く掘り込まれていた。また、燃焼部内から川原石の

第56図 第14号住居跡・出土遺物

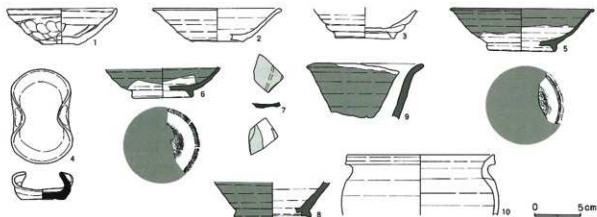


第14号住居跡

- 1 基褐色土 日輝石を少量含む
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を多量に含む 粘粒あり
- 3 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む
- 4 暗赤褐色土 焼土を多量に含む、炭を少量含む
- 5 黒色土 炭化物層
- 6 暗黄褐色土 焼土粒子、炭を多量に含む 粘粒あり

0 50cm

0 1m



第26表 第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B V	H	11.7	3.9	4.1	B, E	不良		暗茶褐	40	
2	碗	NS	NS	13.4	3.6	5.3	H	良好	R	灰白	25	
3	高台付碗	NS	S			6.4	B, H	良好	R	灰褐	80	
4	耳	NS	S			4.9	B, E	不良		淡灰	50	
5	高台付碗	K K	K	15.2	4.6	7.1	B, D	良好		暗い灰	40	
6	高台付碗	K K	K			6.1	D	良好		暗好	20	
7	高台付皿	M	M				B	良好		淡緑	10	
8	壺	底	K			8.0	B, D	良好		淡灰	5	破片
9	広口壺	K	K				B, D	良好		淡緑灰	10	口縁のみ
10	小形鉢	HS	HS	16.0			B, C, D	良好		外-明赤 内-明焼	15	

支脚が出土し、左に寄ることから、二つ掛けと考えた
し。

遺構の切り合い関係は、第20号掘立柱建物跡より古
かった。

遺物は、ほとんど覆土中からの出土である。

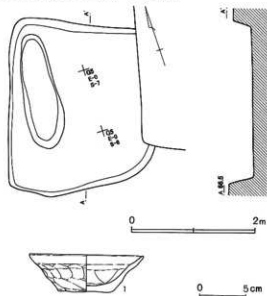
1は、土師器の坏BVである。2は、須恵器（NS）
の椀である。3は、須恵器（NS）の高台付椀である。
4は、須恵器（S）の耳皿である。5・6は、灰粘陶
器の高台付椀である。施釉は、漬け掛けである。7は、
緑粘陶器の高台付皿である。8・9も灰粘陶器であり、
8は長頸壺、9は広口壺である。10は、須恵器（HS）
の小形の鉢である。2・5は底部、3は口縁部、6は
底部と口縁部、10は胴部中位以下が欠損している。7・
8は底部破片、9は口縁部破片である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第14号竪穴
式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第15号住居跡（第57図）

G-4・5グリッドで確認した。周辺は小穴・土壌

第57図 第15号住居跡・出土遺物



第27表 第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈔	底径	胎土	焼成	釉種	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B V	H	11.9	4.0		5.4	B, D, E	普通		暗	程	70

などが密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は方形で、規模は長辺2.60m・短辺
2.30m・深さ0.45mであった。

北西隅付近に、長径1.8mの楕円形の土壌を検出
した。

主軸方位は、N-162°-Wであった。

カマドは東壁に造られていたと思われる。第16号住
居跡に切れ、検出されなかった。

遺構の切り合い関係は、第16号住居跡より古く、第
43号土壌より新しかった。

遺物は非常に少ない。

1は、土師器の坏BVである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第15号竪穴
式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第16号住居跡（第58図）

G-5グリッドで確認した。周辺は小穴・土壌など
が密集し、確認に手間取った。

住居の形状は方形で、規模は長辺3.73m・短辺3.00
m・深さ0.18mであった。南西隅から西壁にかけて、
幅約0.2mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N-10°-Eであった。

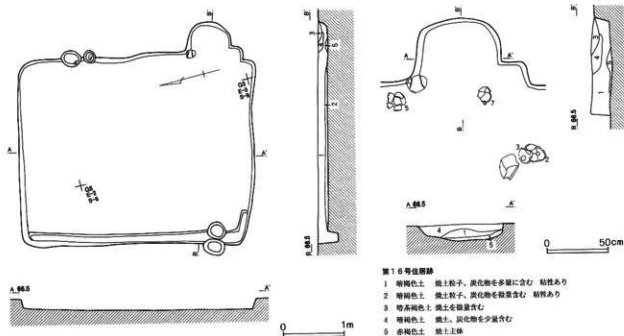
カマドは、東壁の南東隅付近で検出した。左袖相当
部分に川原石が補強材として使用されていた。また、
右袖がくびれていたのは、袖石を抜き取ったためかも
しれない。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第15号住居跡より新しか
った。

遺物は、カマド前面から土師器坏（2・3・5）が
出土した。

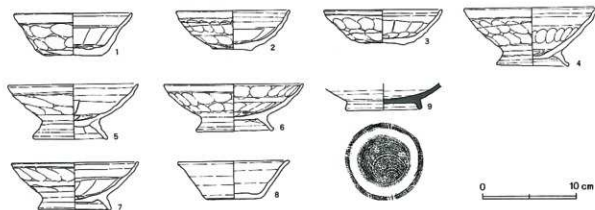
1から7は土師器である。1から3は、坏BVであ
る。4から7は、高脚高台付坏Bである。8は、須恵
器（HS）の椀である。9は、灰粘陶器の高台付椀で

第58図 第16号住居跡・出土遺物



第16号住居跡

- 1 暗褐色土 粘土粒子、炭化物を多量に含む 粘性あり
- 2 暗褐色土 粘土粒子、炭化物を少量含む 粘性あり
- 3 暗褐色土 粘土を少量含む
- 4 暗褐色土 粘土、炭化物を少量含む
- 5 赤褐色土 粘土上床



第28表 第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B V	H 12.4	4.5		6.1	B, E	普通		淡橙	90	
2	坏	B V	H 11.8	4.2		4.2	B, E, F	不良		暗橙	90	カマド
3	坏	B V	H 12.4	3.7		4.1	B, E, K	良好		橙	100	カマド
4	高脚高台付坏	B	H 14.0	6.3		7.6	B, E, F	不良		貴橙	80	
5	高脚高台付坏	B	H 13.7	5.9		7.7	B, D, E	普通		淡橙	100	カマド
6	高脚高台付坏	B	H 14.7	5.0		8.0	B, E, F	不良		黄	70	カマド
7	高脚高台付坏	B	H 13.3	5.1		7.4	B, D, E	良好		橙	40	カマド
8	碗	H S	H 11.7	4.0		5.7	B, E, I	普通	R	にぶい橙	60	
9	高台付碗	K				7.1	D	良好		灰	30	

ある。9は、口縁部が欠損している。

式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第16号竪穴

第17号住居跡（第59図・第60図・第61図）

H・I-4グリッドで確認した。周辺は小穴・土坑・住居跡などが密集し、確認に手間取った。

第18号住居跡に住居跡の大半を切られるため、形状は不明である。わずかに残っている西壁部分の長さ4.39m・深さ0.53mであった。

主軸方位は、N-190°-Eであった。

遺構の切り合い関係は、第18号住居跡より古かった。

遺物は、杯が壁際から出土した。

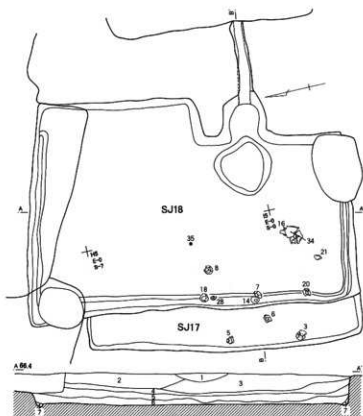
1から4は、土師器の杯である。1・2・4は、杯AM、3は、杯AIIである。5は、須恵器（HS）の高台付碗である。6は、灰釉陶器の段皿である。底部外面に「南南」と朱墨されている。施釉は、内外面とも刷毛塗りである。6は、口縁が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第17号整穴式住居跡を中堀N期に位置付けたい。

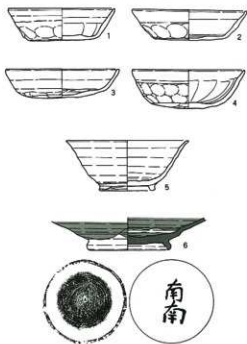
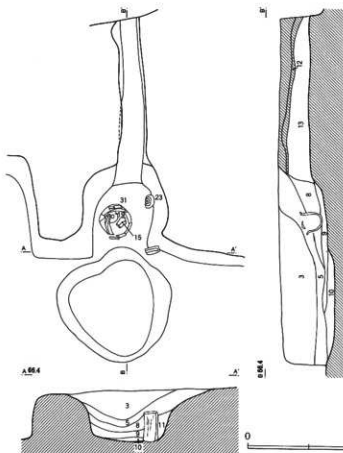
第29表 第17・18号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他			
1	杯	A IV	H	11.9	3.5	7.2	R, D, E	普通	通	黄	橙	100			
2	杯	A IV	H	12.2	3.2	7.6	B, D, E, H	不良		橙	橙	100			
3	杯	A II	H	12.0	3.2	7.0	B, D, E, H	普通	通	淡黄	橙	100			
4	杯	B	H	11.9	4.2	5.5	B, C, E	普通	通	淡	橙	80			
5	高台付碗	H		12.9	5.4	5.4	B	良好	好	灰	黄	70			
6	段皿	K			8.4	8.4	D	良好	好	淡灰	黄	50	口縁欠損		
7	杯	A VI	H	13.2	3.5	7.0	B, E	普通	通	淡黄	橙	90			
8	杯	A VI	H	12.9	3.5	6.6	B, E	不良	良	黒	褐	100	口縁一部欠損		
9	杯	A VI	H	13.6	3.5	7.2	B, E	普通	通	乳	灰	40			
10	杯	A VI	H	12.8		6.6	B, E	普通	通	暗	黄	褐	20		
11	杯	A II	H	12.1	3.5	6.2	B, C, D	普通	通	淡	黄	橙	60	カマド	
12	杯	A II	H	11.8	3.4	7.0	B, E, F	不良		明	黄	橙	40	下層	
13	杯	A II	H	12.1	3.9	7.2	B, C, E	不良		黄	橙	60	下層		
14	杯	B III	H	11.7	3.8	7.0	B, E, H	普通	通	淡	黄	橙	100		
15	杯	A V	H	11.7	3.9	6.0	B, E	普通	通	淡	茶	40	カマド		
16	杯	A V	H	11.6	3.4	8.0	B, E, H	不良		暗	灰	褐	100		
17	杯	A IV	H	12.0	3.2	7.5	B, E, F	普通	通	淡	橙	30			
18	皿	II	H	13.2	2.4	7.2	B, E	普通	通	こ	げ	茶	80		
19	皿	IV	H	12.6	2.1	6.3	B, E, H	良好	好		橙	100	カマド		
20	碗	NS		13.5	3.7	5.8	B, E	良好	好	R	灰	60			
21	碗	NS		13.3	4.1	6.2	B	良好	好	R	灰	25			
22	碗	S		11.7	4.0	5.5	B, G	良好	好	R	青	灰	25	カマド	
23	碗	NS		12.7	2.8	6.3	B, E, I	良好	好	L	灰	黄	100	カマド	
24	碗	NS		12.6	2.6	6.8	B, I	良好	好	L	灰	90			
25	高台付碗	S		12.7	4.9	6.3	B, D, I	良好	好		灰	10	下層		
26	高台付碗	HS		16.0			B, I	普通	通	灰	黄	30			
27	高台付碗	K				8.6	B	良好	好	淡	灰	10			
28	高台付碗	K				7.9	B	良好	好	暗	灰	20	転用説		
29	高台付皿	K				5.9	B, D	良好	好	淡	灰	30			
30	高台付碗	白磁						良好	好	白		10			
31	甕	B II b	II	19.9	25.7	3.4	B, C, E			外-口縁部、灰釉。胴部以下-明褐色。胴中位、口縁、明褐色部、胴中位、淡黄		100	カマド		
32	甕	B II a	HS	19.4			B, C, E, H	良好	好	R	浅	黄	橙	50	カマド
33	四耳壺	S		9.9	19.9	4.8	B, D, G	良好	好		青	灰	80		
34	大	S					B, D, G				青	灰	20		

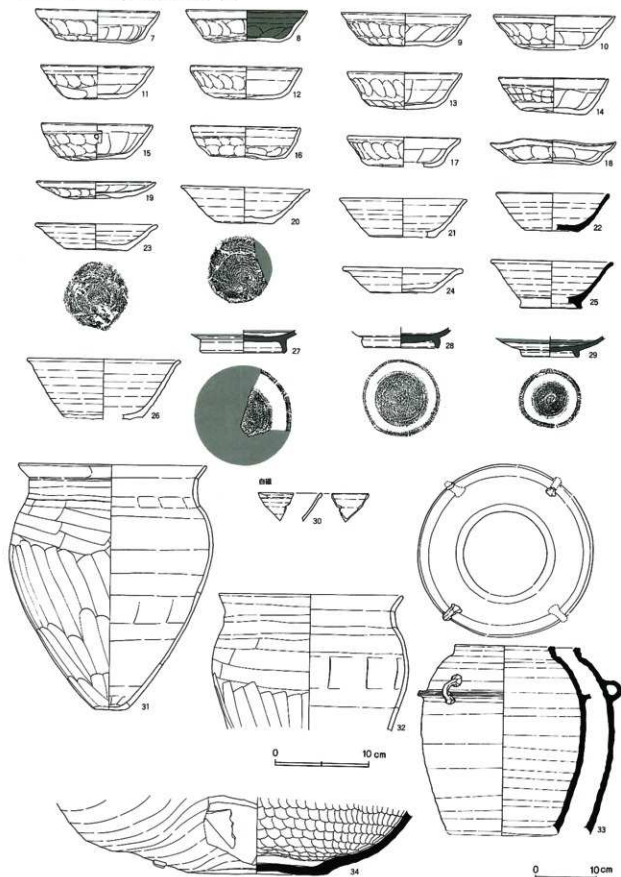
第59図 第17・18号住居跡・出土遺物(1)



- 第18号住居跡
- 1 暗灰褐色土 雑土、炭化物、日曜石を多量に含み、白色粒子を少量含む
 - 2 暗灰褐色土 雑土、白色粒子を少量含む
 - 3 暗灰褐色土 雑土ブロックを少量含む、炭化物、白色粒子を多量に含む
 - 4 暗灰褐色土 雑土を少量含む、白色粒子を多量に含む
 - 5 暗灰褐色土 雑土、炭化物を多量に含み、白色粒子を多量に含む
 - 6 暗褐色土 炭化材を多量に含み、炭化物を少量含む
 - 7 暗褐色土 雑土ブロックを多量に含む
 - 8 暗灰褐色土 雑土を多量に含み、炭化物を少量含む
 - 9 暗褐色土 雑土粒子、炭化物を多量に含む
 - 10 黒褐色土 炭化物層
 - 11 暗灰褐色土 雑土を少量含む
 - 12 赤褐色土 堆山が原因により赤色化
 - 13 暗灰褐色土 雑土を少量含む、白色粒子を多量に含む



第60圖 第17・18号住居跡出土遺物(2)



第18号住居跡（第59図・第60図・第61図）

H・I-4・5グリッドで確認した。周辺は小穴・土壌・住居跡など遺構が密集しており確認に手間取った。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺5.20m、短辺2.71m、深さ0.50mであった。東壁を除き、幅約0.3mの壁溝を検出した。住居覆土の最下層（6層）に多量の炭化材を含んでいた。また壁面がかなり焼けていたことから、焼失住居跡と考えられた。

主軸方位は、N-99°-Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。煙道先端を中世第16号竪穴状遺構に切られたが、残存状態は良好で、長さ1.3mにもおよぶ地山を掘り抜いた煙道を確認できた。左袖は、地山を掘り残して構築されていたが、右袖は、住居の壁をそのまま利用していた。いわゆる「片袖型」といわれる型式である。右袖に当たる部分には、切石が使用されていた。燃烧部に掘り込みはみられず、段をもって煙道部に移行していた。焚き口部の前面には、不整形の浅い掘り込みがみられた。

カマドの燃烧部内からは、土師器甕(31)がカマドにかけられた状態で出土し、甕の中には、土師器皿(19)が入っていた。甕が左側に寄っていたことから二つ掛けと考えたい。

遺構の切り合い関係は、中世第16号竪穴状遺構、第19・20号住居跡、第46号土壌より古く、第17号住居跡

より新しかった。

遺物は、覆土中・床面から多量に出土した。とくに覆土中から白磁片(30)が出土した。また、住居跡のほぼ中央の床面から線刻のある滑石製紡錘車(35)が出土した。

7から17は、土師器の坏である。7から10は、坏AⅥである。11から13は、坏AⅡである。14は、坏BⅢである。15・16は、坏AⅤである。17は、坏AⅣである。18は、ⅢⅡである。19は、ⅢⅣである。10・17は、底部が欠損している。8は、内面のみ黒色処理が施されている。

20から23は坏、24はⅢ、25・26は、高台付碗である。20・21・23・24は、須恵器(NS)である。22・25は、須恵器(S)である。26は、須恵器(HS)である。21・22・25は底部、26は底部と高台が欠損している。

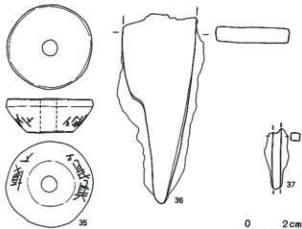
27から29は、灰釉陶器の高台付碗である。30は、玉縁口縁の中国産(ケイ州窯)の白磁である。27から29は、底部のみである。30は、口縁部破片である。

31・32は、土師器の甕である。33は、肩部に付けられた凸帯の四箇所に、把手の付く須恵器(S)の四耳壺である。34は、須恵器(S)の大甕の底部である。32は胴部下位以下、33は底部が欠損している。

35は、石製の刻字紡錘車であり、紡錘車の下側傾斜面に「榎下 □□(具) □(具)」と判読できる文字が刻まれている。36・37は、鉄製品である。36は延べ板状鉄製品、37は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第18号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第61図 第17・18号住居跡出土遺物(3)



第19号住居跡（第62図・第63図）

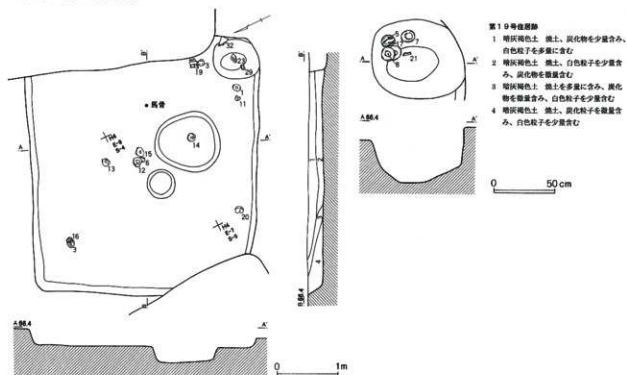
H-4・5グリッドで確認した。周辺は、小穴・土壌・住居跡など遺構が密集し、確認に手間取った。

住居の形状は長方形で、規模は長辺4.1m・短辺3.54m・深さ0.25mであった。中央やや南寄りに、径1mの不整形の土壌と小穴を検出した。

主軸方位は、N-115°-Eであった。

カマドは、第20号住居跡に切られていた。南東隅に

第62図 第19号住居跡



不整形形の貯蔵穴が存在していたことから、西壁に造られていたと考えられる。

遺構の切り合い関係は、中世第15号堅穴状遺構、第20号住居跡より古く、第18号住居跡より新しかった。

遺物は、床面および貯蔵穴から多量に出土した。貯蔵穴内からは、土師器杯(5・7・8・17・21)5点がまとめて出土した。さらに覆土上層から馬骨が、ほぼ一頭分出土した。住居跡の埋没途中にできた窪みを利用して埋葬されたと考えた(第762図)。

1から22は、土師器である。1・3は、杯BⅡである。他は、杯BⅤである。19から22は、高脚高台付杯Bである。23から27は、須恵器(NS)である。23は、

椀であり、他は、高台付椀である。20は高台、21は底部と高台、22・24は底部、26・27は口縁部が欠損している。

28から30は、灰粘陶器である。28は高台付皿、29は高台付椀である。30は、小瓶であろう。28から30は、底部のみである。

31は、須恵器(NS)の長頸壺であろう。32は、須恵器(HS)の羽釜である。31は、底部のみである。32は、底部が欠損している。

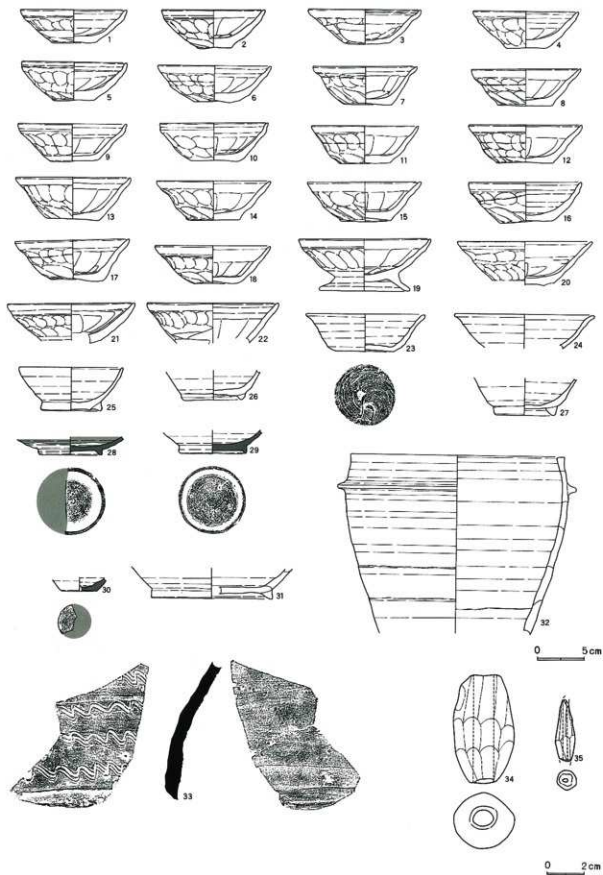
34・34は、土鍔である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第19号堅穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第30表 第19号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	器	底径	胎土	焼成	韃靼	色調	残存	出土位置その他
1	杯	BⅡ	H	11.1	3.5		4.8	B, E, F	良好	淡橙	90	
2	杯	BⅤ	H	10.8	4.1		3.6	B, E, H	普通	淡はだ	70	
3	杯	BⅡ	H	11.7	3.7		4.5	B, E, F	普通	赤橙	90	
4	杯	BⅤ	H	11.0	3.9		4.0	B, E	普通	暗橙	100	

第63图 第19号住居跡出土遺物



第31表 第19号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪軸	色調	残存	出土位置その他	
5	坏	B V	H	10.9	4.1		4.4 B, E, F	普通		淡	茶	100	
6	坏	B V	H	11.8	3.9		3.9 B, D, E	良好		淡	橙	70	
7	坏	B V	H	10.9	4.0		5.1 B, E	普通		淡	黄	100	
8	坏	B V	H	11.4	3.9		5.6 B, E, H	良好		暗	橙	100	
9	坏	B V	H	11.3	4.0		5.0 B, E, H	普通		黄	褐	20	下層
10	坏	B V	H	11.3	4.1		4.9 B, E, H	不良		黄	橙	40	下層
11	坏	B V	H	11.1	4.0		5.3 B, D, E, H	普通		淡	橙	90	
12	坏	B V	H	11.8	4.0		5.9 B, E	普通		橙	橙	100	口縁一部欠損
13	坏	B V	H	11.9	4.5		5.4 B, E, H	普通		暗	橙	70	
14	坏	B V	H	11.9	4.1		5.5 B, E, H	普通		暗	茶	100	
15	坏	B V	H	11.8	4.2		5.1 B, E, H	普通		暗	茶	90	口縁一部欠
16	坏	B V	H	11.7	4.3		5.5 B, E, G	不良		橙	橙	80	
17	坏	B V	H	12.5	4.4		5.6 B, E	普通		淡	橙	90	口縁一部欠損
18	坏	B V	H	12.1	4.0		4.5 B, E, H	普通		淡	橙	40	
19	高脚高台付坏	B	H	13.8	5.5		9.3 B, E, H	普通		淡	淡	70	
20	高脚高台付坏	B	H	14.1			B, E	良好		赤	橙	30	
21	高脚高台付坏	B	H	13.4			B, E, F	不良		橙	橙	80	
22	坏	B	H	13.8			B, E, F	不良		橙	橙	10	破片
23	碗	NS		12.4	3.9		6.2 B, E, I	良好	R	褐	灰	100	
24	碗	NS		14.7			E, I	普通		褐	灰	20	
25	高台付碗	NS		10.9	4.6		6.0 A, B, E, H	良好	R	灰	白	50	
26	高台付碗	NS					6.1 B, H	良好	R	灰	白	100	底部
27	高台付碗	NS					6.0 B, E, H	良好	R	淡黄褐。底面・体部下半 - 黒	灰	100	底部
28	高台付碗	K					6.4 B, D	不良		淡	灰	20	
29	高台付碗	K					6.8 B, D	良好		淡	灰	20	
30	壺	K					3.7 D	良好		明	灰	10	
31	壺	底部	NS				12.7 B, H	良好	R	外 - 淡橙。内 - 灰白	灰	30	
32	瓶	C	HS	22.5	3.4		B, E, G, K	良好		外 - 明赤。内 - 明褐	灰	20	
33	大	壺	S				B	良好		灰	灰	10	

第32表 第19号住居跡出土土錫観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
34	にぶい橙	100	5.7	3.3	1.1	57.5	A 1	I a	1	
35	にぶい橙	60		1.0	0.3	3.2	C 2	II b	378	

第20号住居跡(第64図・第65図・第66図)

H-5グリッドで確認した。周辺は、小穴・土壇・住居跡などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居の形状は長方形で、規模は長辺4.60m・短辺3.19m・深さ0.29mであった。

主軸方位は、N-116°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して構築していた。燃焼部には、掘り込みはなく、ゆるい段をもって煙道部に移行する。煙道部は、長さ1mを超える長い煙道であった。焚き口部前

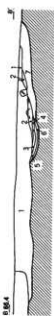
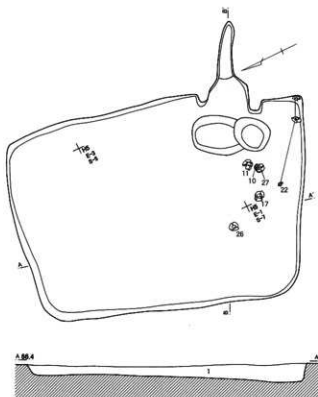
面には、楕円形の掘り込みがあった。またカマド右袖付近からカマドの構築材であった川原石がまとまって出土した。

遺構の切り合い関係は、第18・19号住居跡、第99号土壇より新しかった。

遺物は、カマド燃焼部から土師器甕(30・31・32・33・36)などが多量に出土した。そのほか、カマド前面の床面から須恵器杯が6点出土した。

1から8は、土師器である。4・5は、坏Bだが、それ以外は、坏B Vである。4・5は、底部が欠損し

第64図 第20号住居跡



ている。

9から18は、椀である。9は須恵器(S)、10から12・14・15・18は、須恵器(HS)、他は須恵器(NS)である。19から24は、須恵器(NS)の高台付椀である。19は、底部外面に墨書「床」がみられる。25から28は、須恵器(NS)の高脚高台付椀である。12・18は底部、23は高台、24・28は口縁部が欠損している。11・12は内面体部、22は内面口縁部に黒色の付着物が確認できる。12・22は、油煙の痕跡と考えられる。

29から36は、土師器の甕である。37は、須恵器(HS)の羽釜である。29・30は胴部下位以下、31から35・37は胴部上位以下が欠損している。36は底部のみである。

38から43は、平瓦である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第20号竪穴式住居跡を中掘堀期に位置付けたい。

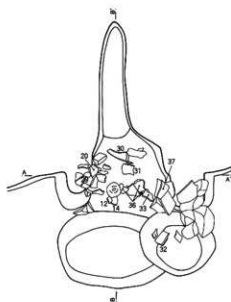
第21号住居跡 (第67図)

H-4グリッドで確認した。周辺は、遺構が密集し、確認に手間取った。また、遺構の重複が激しく、西側は調査区外のため、わずかにカマドと南壁を検出した。残存部の深さは、0.61mであった。

主軸方位は、N-118°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。燃焼部から煙道部には、段をもって移行していた。

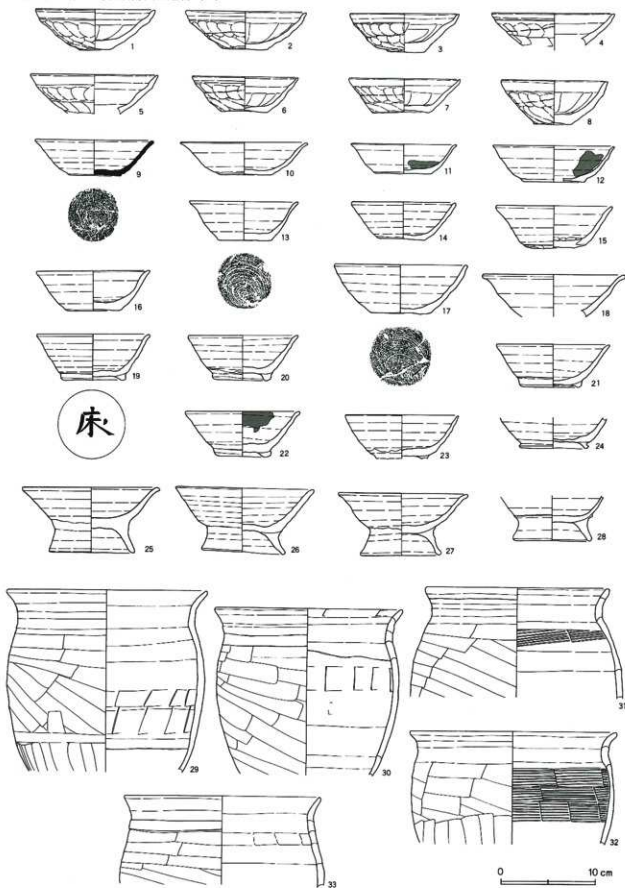
遺構の切り合い関係は、第22号



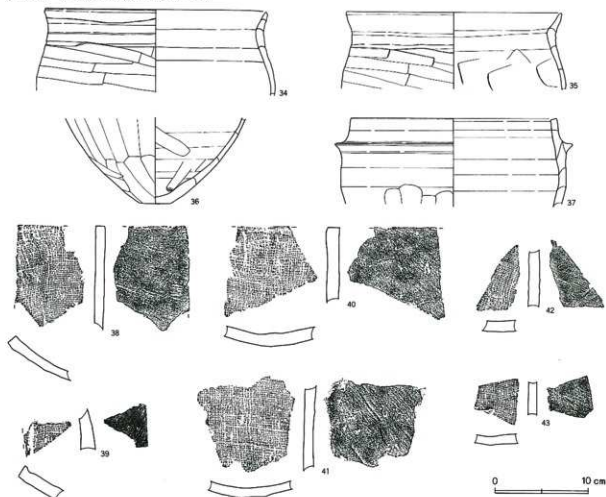
- 第20号住居跡
- 1 暗灰褐色土 焼土を少量含む
 - 2 暗灰褐色土 炭化物を少量含む
 - 3 黒色土 炭化材主体
 - 4 暗灰褐色土 炭化物を少量含む
 - 5 暗灰褐色土 白色粒子を多量に含む
 - 6 暗褐色土 焼土を少量含む
 - 7 暗灰褐色土 焼土を少量含む



第65图 第20号住居跡出土遺物(1)



第66図 第20号住居跡出土遺物(2)



第33表 第20号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B V	H	126	4.3	3.5	B, E, H	普通通		淡 橙	50	カマド カマド 下層 カマド
2	坏	B V	H	128	4.0	4.9	B, E, H	普通通		赤 橙	40	
3	坏	B V	H	11.4	4.0	3.9	B, E, F	普通通		橙	80	
4	坏	B	H	128			B, E	普通通		暗 褐	20	
5	坏	B	H	134			B, E, H	普通通		淡 橙	30	
6	坏	B V	H	11.2	3.7	4.7	B, E, H	不良		淡 褐	50	
7	坏	B V	H	11.7	3.7	5.9	B, D, E	良好		淡 橙	100	
8	坏	B V	H	11.1	4.6	3.9	B, E, F	普通通		こげ茶	100	
9	碗	S	S	12.4	3.7	5.4	B, I	良好	R	灰	80	
10	碗	H S	S	13.1	3.4	5.5	B, E, H	良好	R	淡 橙	60	
11	碗	H	H	11.0	3.1	5.9	B, E, H	良好	R	淡 橙	30	
12	碗	H S	S	12.7	3.8	6.4	B, E, I	良好	R	にぶい	40	
13	碗	N S	S	11.4	4.1	5.1	B, E, I	普通通	R	灰	50	
14	碗	H S	S	11.0	3.9	5.0	B, E, I	普通通	R	にぶい黄	50	
15	碗	H S	S	12.2	4.4	6.3	C, F	普通通		淡 灰 褐	100	
16	碗	N S	S	11.9	4.2	4.9	B, E	良好	R	灰	30	
17	碗	N S	S	13.8	5.1	6.2	B, E, I	良好	L	にぶい黄	100	
18	碗	H S	S	14.8			B, D, E	良好	R	灰 白	25	

第34表 第20号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	踵	底径	胎土	焼成	軸轆	色調	残存	出土位置その他
19	高台付碗	NS	11.7	4.8		6.2	B, E, H	良好	R	灰白	60	墨書「床」
20	高台付碗	NS	11.5	4.7		5.3	E, G, I	良好	L	にぶい橙	80	カマド
21	高台付碗	NS	12.0	4.5		5.8	B, E, I	普通	R	灰白	70	
22	高台付碗	NS	12.1	4.2		5.0	B, E, I	良好	R	灰	75	
23	高台付碗	NS	11.9				B, E, G	普通	R	灰白	20	カマド
24	高台付碗	NS				6.9	B, E, H	良好	L	灰白	60	
25	高脚高台付碗	NS	14.5	6.9		9.1	E, H, I	普通		やや淡い橙	90	
26	高脚高台付碗	NS	14.4	7.1		8.5	B, E	良好	L	灰白	100	
27	高脚高台付碗	NS	13.6	6.6		8.2	B, E, I	良好	L	灰	100	
28	高脚高台付碗	NS				7.9	B, E	良好	R	灰白	20	カマド
29	甕 B IV c	H	20.9				B, D, E	良好		淡橙	25	カマド
30	甕 A III b	H	19.8				B, E	良好		橙	30	カマド
31	甕 A III c	H	18.9				E, H	良好		淡橙	25	カマド
32	甕 A IV c	H	21.6					良好		淡橙	25	
33	甕 A III d	H	20.5				B, E, H	良好		淡橙	15	カマド
34	甕 A III d	H	23.4				D, E, I	良好		明赤褐	20	
35	甕 A III d	H	22.9					良好		明赤褐	30	カマド
36	甕底部	H						良好		明赤褐	100	底部。カマド
37	羽 A II a ロ	H S	21.8		2.8		E, G, H B, C, E, H	良好		淡橙	25	カマド

第35表 第20号住居跡出土瓦観察表

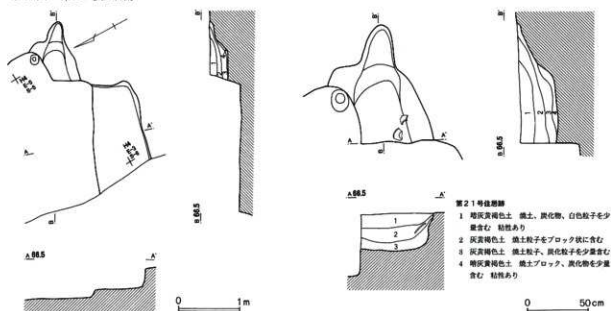
番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
38	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2面取り
39	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面取り
40	平瓦	中間	刷り消し	布	1面取り
41	平瓦	中間	刷り消し	布	-
42	平瓦	中間	刷り消し	布	-
43	平瓦	中間	刷り消し	布	-

住居跡よりも古かった。

遺物は、カマド内から土師器、須恵器の破片が少量出土した。図示できる遺物はない。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第21号壑穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第67図 第21号住居跡



第22号住居跡 (第68図)

H-4グリッドで確認した。周辺は遺構が密集し、確認に手間取った。西側が調査区外のため、全容は不明だが、形状は長方形と思われる。規模は、短辺2.94m・深さ0.08mであった。

主軸方位は、N-112°Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。焼き口部の両脇から、補強材として使用された川原石が出土したことから、袖は造られなかったと考えられる。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。長径

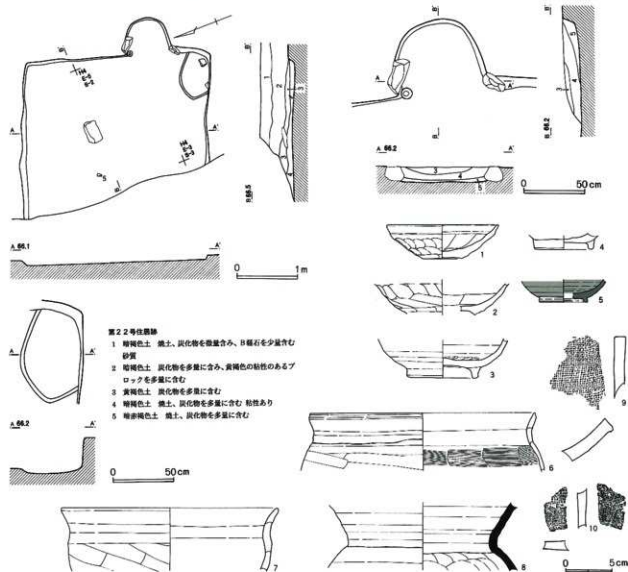
0.79m・短径0.5m・深さ0.15mで浅い皿状であった。

遺構の切り合い関係は、第39号住居跡より古く、第21号住居跡より新しかった。

1・2は、土師器である。1は坏BⅡ、2は、高脚高台付碗である。3は、須恵器(HS)の大形の高台付碗である。4は、須恵器(NS)の高台付碗である。5は、小形の灰釉陶器の高台付碗である。2は口縁部と底部と高台、3は口縁部、5は口縁部と底部が欠損している。4は底部のみである。

6は、土師器の甕である。7は、土師器の鉢である。8は、須恵器(S)の甕である。6・7は胴部上位以

第68図 第22号住居跡・出土遺物



第36表 第22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B II	H	11.6	3.6	4.1	B, D, E	普通		暗褐色	30	
2	高台付椀	H					E, H, K	普通		暗褐色	20	
3	高台付椀	HS				6.8	B, E, H	良好	R	淡黄褐色	25	
4	高台付椀	NS				5.9	B, E	良好	R	青灰褐色	50	
5	高台付椀	K					B	良好		淡灰	30	
6	甕	A III c	H	23.9			B, E	良好		外-淡黄褐色 内-淡褐色	20	
7	甕	A IV c	H	22.9			B, E, H	良好		淡黄褐色	15	
8	須恵甕	S					B, G	良好		青灰褐色	20	

下、8は口縁部と胴部上位以下が欠損している。

9・10は、平瓦である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第22号堅穴式住居跡を中畑VI期に位置付けたい。

第23号住居跡（第69図・第70図）

H・I-4グリッドで確認した。周辺には小穴や住居跡が密集していた。覆土の色調が遺構確認面の色調と似たため確認に手間取った。

西側は調査区外のため全容は不明であったが、形状は長方形と思われる。規模は、短辺3.67m・深さ0.22mである。壁溝は東壁と北壁の一部に幅30cm検出した。

主軸方位は、N-4°-Eであった。

カマドは検出できなかったが、中央やや西寄りに径0.48mの地床跡を検出できた。地床跡だけの平安時代の住居は、遺跡内の唯一の例である。

遺構の切り合いは、みられなかった。

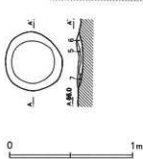
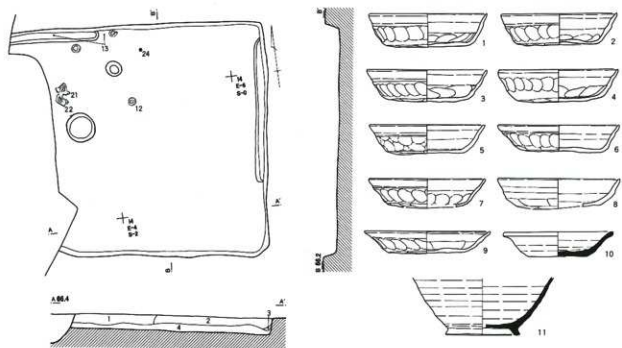
第37表 第22号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
9	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
10	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	-

第38表 第23号住居跡出土遺物観察表

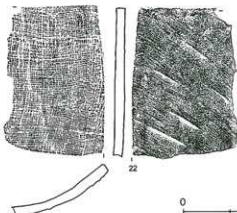
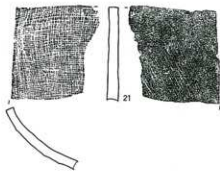
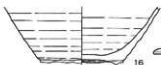
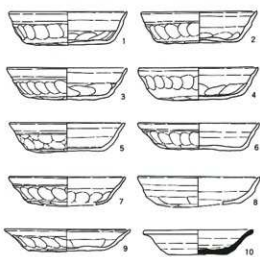
番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A V	H	12.4	3.5	8.7	B, E, H	普通		淡黄褐色	40	
2	坏	A V	H	12.1	3.3	8.7	B, D, E	不良		淡黄褐色	80	
3	坏	A V	H	12.7	3.4	8.5	B, D, E	普通		淡黄褐色	100	
4	坏	A V	H	12.5	3.4	9.0	B, D, E	普通		淡黄褐色	90	
5	坏	A V	H	12.2	3.1	7.0	B, C, E, F	不良		淡黄褐色	60	
6	坏	A V	H	12.8	3.9	8.0	B, E	普通		淡黄褐色	60	
7	坏	A V	H	12.3		8.0	B, E	不良		淡黄褐色	30	
8	坏	A V	H	12.9		9.0	B, E, H	普通		淡黄褐色	50	
9	皿		H	13.2	2.3	8.0	B, D, E, F	普通		黄褐色	60	
10	椀	S		11.5	2.6	6.2	B, E	良好		青灰褐色	50	
11	高台付椀	NS				7.5	B, I	良好		灰	20	
12	高台付椀	NS		14.5	5.2	7.0	B, I	良好		灰白・灰	60	
13	高台付椀	NS		14.8	4.0	6.1	B, E, I	普通		灰白	90	
14	高台付椀	NS		17.3	6.4	7.9	B, K	良好		青灰	20	
15	高台付椀	NS		16.5			B, E, I	良好		灰白	5	
16	高台付椀	NS					B, E, I	普通		灰	50	
17	高台付椀	NS				5.3	B, E, I	普通		灰黄	30	
18	蓋	HS		12.8	1.7	5.7	B	良好		灰	70	
19	蓋	HS		14.1	1.7	6.4	B, E, I	良好		にぶい黄褐色	40	
20	高台付椀	K		13.1	4.8	6.3	D	良好		淡灰	40	

第69図 第23号住居跡・出土遺物(1)

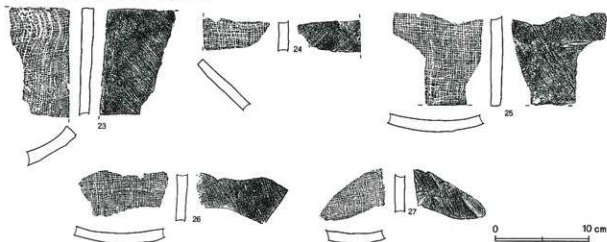


第23号住居跡

- 1 焼灰褐色土 焼土、炭化粒子を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 2 焼灰褐色土 炭化粒子を少量含む、白色粒子を多量含む
- 3 焼灰褐色土 焼土、炭化物を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 4 焼灰褐色土 白色粒子を多量に含む、砂粒を少量含む
- 5 赤褐色土 焼土層
- 6 焼灰褐色土 焼土、炭化物を少量含む
- 7 焼灰褐色土 炭化物を少量含む



第70図 第23号住居跡出土遺物(2)



地床跡の北側から瓦(21・22)が出土し、住居北側から須恵器高台付椀(12・13)・瓦(24)が出土した。

1から8は、土師器の坏AVである。9は、土師器の皿である。10は、須恵器(S)の皿である。11から23までは、高台付椀である。11・14は須恵器(S)、他は、須恵器(NS)である。7・8は底部、11は口縁部と底部、14は底部、15は底部と高台、16は口縁部と高台、17は口縁部が欠損している。

18は須恵器(S)、19は、須恵器(NS)の蓋である。20は、灰釉陶器の高台付椀である。

21から27は、平瓦である。

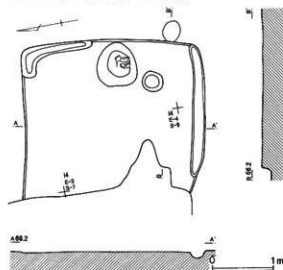
以上、出土遺物から第23号竪穴式住居跡を中壩Ⅳ期に位置付けたい。

第24号住居跡(第71図)

1-4グリッドで確認した。周辺は住居の重複が激しく、第25号住居跡の床面精査中に検出した。

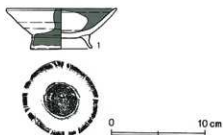
第26号住居跡が住居の西側をに切るため、全容は不明だが、形状は方形と思われる。規模は短辺2.87m。

第71図 第24号住居跡・出土遺物

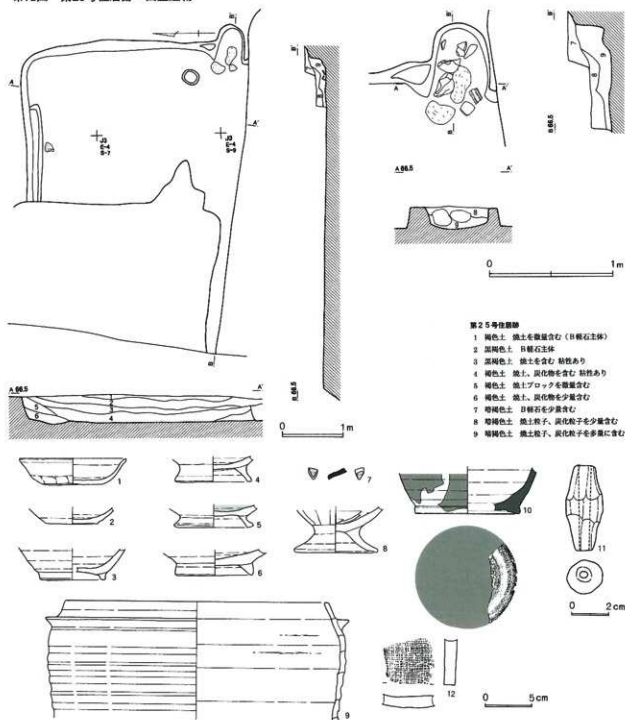


第39表 第23号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
21	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2 面取り
22	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2 面取り
23	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2 面取り
24	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1 面取り
25	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1 面取り
26	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	-
27	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	-



第72図 第25号住居跡・出土遺物



第25号住居跡

- 1 褐色土 焼土を微量含む(日曜石主体)
- 2 黒褐色土 日曜石主体
- 3 黒褐色土 焼土を含む 粘性あり
- 4 褐色土 焼土、炭化物を含む 粘性あり
- 5 褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 6 褐色土 焼土、炭化物を少量含む
- 7 暗褐色土 日曜石を少量含む
- 8 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 9 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を多量に含む

第40表 第24号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	踵	底径	胎土	焼成	織織	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	NS	11.6	4.2		6.4	B, C, E, I	良好		明赤褐	90	

第41表 第25号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
11	浅黄橙	100	4.6	1.9	0.4	11.7	B I	I a	45	

深さ0.19mであった。北東隅と南壁に壁溝を幅30cm検出した。南東寄りには小穴が1基検出できた。

主軸方位は、N-10°-Eであった。

カマドの大半は、燃焼部の掘り込みのみを確認できただけであった。

遺構の切り合い関係は、第25・26号住居跡より古かった。

遺物は、カマド燃焼部内から須恵器（NS）の高台付椀（1）が出土した。遺物は、口縁部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第24号竪穴式住居跡を中期Ⅶ期に位置付けたい。

第25号住居跡（第72図）

I-4グリッドで確認した。周辺は住居の重複が激しく、確認に手間取った。

西側を第26号住居跡に、南側を第27号住居跡に切られるため、全容は不明であった。残存部の深さは0.45mであった。壁溝は、北壁に幅20cm認められた。

主軸方位は、N-9°-Eであった。

カマドは、東壁で検出できた。袖は、明確に検出されず、右袖の先端部分に袖石の抜き取り痕跡である円形の窪みがみられた。そのため、造り付けカマドであったと考えられた。燃焼部の掘り込みは確認できなかった。燃焼部内から構築材である大形の川原石がま

まて出土した。

遺構の切り合い関係は、第26・27号住居跡より古く、第25号住居跡より新しかった。

1は、土師器の坏ANである。2は、須恵器（HS）の椀である。3は、須恵器（NS）の高台付椀である。4・5は、須恵器（HS）の高脚高台付椀である。2は口縁部、3は口縁部と底部が欠損している。4・5は、底部のみである。5は、内面のみ黒色処理が施されている。

6は、須恵器（HS）の壺の底部である。7は、緑釉陶器の段皿である。8は、土師器の台付甕である。9は、土師器の羽釜である。10は、灰釉陶器の長頸壺である。7は体部破片、8は台部のみである。9は胴部中位以下、10は口縁部と底部が欠損している。

11は、土錘である。12は、平瓦である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第25号竪穴式住居跡を中期Ⅶ期に位置付けたい。

第26号住居跡（第73図）

I-4グリッドで確認した。周辺は住居の重複が激しく、確認に手間取った。

西半分は調査区外のため全容は不明であった。規模

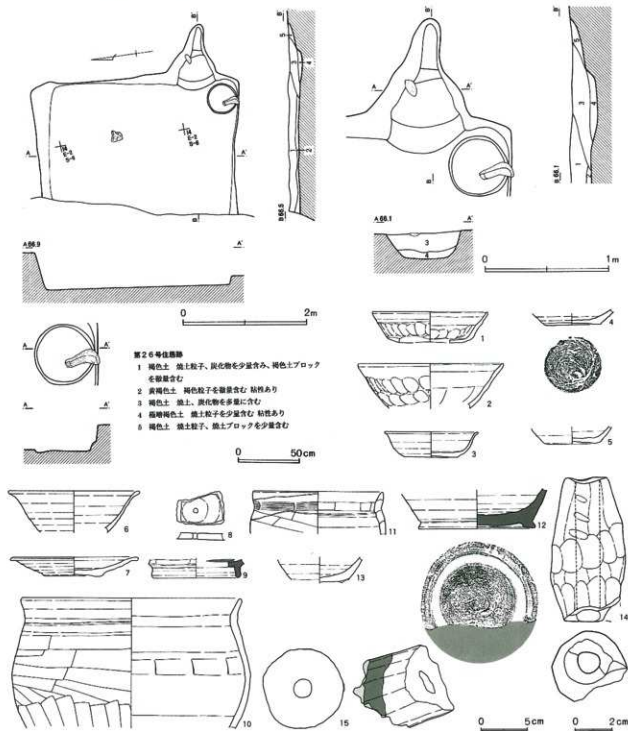
第42表 第25号住居跡出土互観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
12	平瓦	酸化炭	刷り消し	布	1面面取り

第43表 第25号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	跨	底径	胎土	焼成	軸	色調	残存	出土位置その他			
1	坏	A	112	28		6.3	B, F	良	好	暗	椀	30			
2	椀	HS				5.4	B, C, E, G, I	良	好	R	灰	60			
3	高台付椀	NS				6.6	B, E, I	良	好	R	外-灰 内-灰白	20			
4	高脚高台付椀	HS				8.0	B, E	良	好	R	淡	椀		40	
5	高脚高台付椀	HS				7.0	B, E, I	普通	L	外-椀 内-褐灰	20				
6	壺	HS				7.8	B, C, E, H	良	好	L	淡	赤		100	
7	段皿	M					B	良	好		淡	緑		5	
8	台付甕	H				8.6	B, D, E	良	好		淡	橙		10	台部のみ
9	羽A II	BI	27.8		1.8		A, B, C, G, I	良	好		明	赤		25	カマド
10	長頸壺	K				11.0	D	良	好		淡	灰		10	

第73図 第26号住居跡・出土遺物



第44表 第26号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	輪軸	色调	残存	出土位置その他
1	坏	A V	12.1	3.3		6.7	B, C, D	普通		橙黄	20	
2	坏	A	15.3				B, C, E			黄褐		
3	碗	H S	9.9	2.6		5.7	B, E, I	普通	R	浅黄	60	
4	碗	H S				5.8	B, H	良好	L	灰褐	100	底部

第45表 第26号住居跡出土土物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
5	碗	H S				4.1	B, E, I	良好	R	淡黄褐	30	
6	碗	H S	13.8				B, C	良好	L	いぶい褐	5	
7	皿	H S	12.4	2.8		5.6	B, E, G, H	普通	R	淡黄褐	60	
8	碗	H S					B, F, H	普通		こげ茶	10	破片。穿孔
9	高台付碗	K				8.7	B	良好		淡灰		破片。転用碗
10	甕 A IV b	H	22.9				B, E, K	良好		淡橙	20	
11	台付壺	H	13.6				B, D, E	良好		淡橙	25	
12	長頸壺	K				11.9	D	良好		明灰褐	10	底部
13	高台付碗	H S					C, E, I	良好	R	暗灰褐	30	カマド

第46表 第26号住居跡出土土鐘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
14	いぶい褐	70	7.5	40	1.2	95.6	A 1	II a	2	

は、短辺3.30m・深さ0.7mであった。

主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出できた。袖よ、確認できなかった。燃焼部は、円形に浅く掘り込み、段をもって煙道部に移行していた。

貯蔵穴は、カマド右脇、南東隅で検出した。径0.49mの円形で深さは0.2mである。

遺構の切り合い関係は、第24・25号住居跡より新しく、第27号住居跡より古かった。

1・2は、土師器である。1は坏AV、2は高台付坏Aである。1は底部、2は底部と高台が欠損している。

3から5は、須恵器(HS)の碗である。6・13は、須恵器(HS)の高台付碗であろう。7は、須恵器(HS)の皿である。8は、底部中央に穿孔のある須恵器(HS)の碗の破片である。4・5は、底部のみである。6は底部と高台、13は口縁部と高台が欠損している。

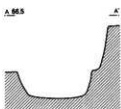
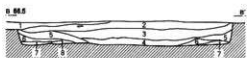
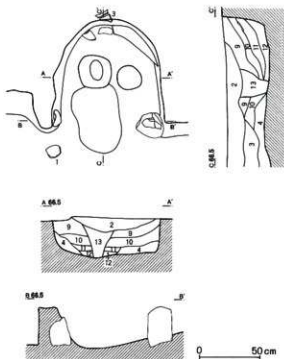
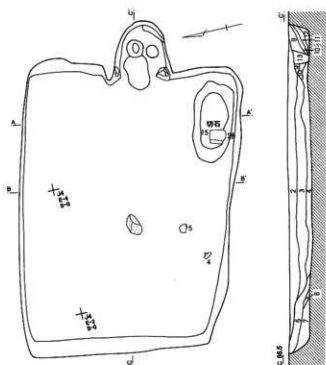
第47表 第27号住居跡出土土物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B II	H	12.5	4.7		6.0	E, F, H	普通		淡橙	70	カマド
2	碗	NS	12.9	5.6		6.3	E, I	普通		灰白	50	
3	高台付碗	NS	13.6				B, E	良好	R	灰	20	
4	高台付碗	H S				5.8	B, D, E	良好	R	明赤褐	100	底部。粘土板
5	高台付碗	K	13.4	4.3		6.0	D, K	良好		淡灰	60	
6	高台付碗	K	15.3				D, K	不良		暗灰褐	30	
7	高台付碗	K				8.2	B, D	良好		暗灰	20	
8	高台付碗	K				6.9	D	良好		淡灰。輪轆-こい黄緑	20	輪轆-こい黄緑色
9	輪花碗	M					B	良好		淡緑	10	
10	碗	M					B	良好		淡緑	10	
11	甕 B III a	H S	19.0				B, E	普通		淡黄橙	30	カマド
12	羽A II b 口	H S	22.8		2.0		B, E, H	良好		灰白	20	上層
13	壺	K					D	良好		淡灰	5	破片

第48表 第27号住居跡出土土鐘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
14	灰	70		3.2	1.1	56.1	A 1	II a	3	

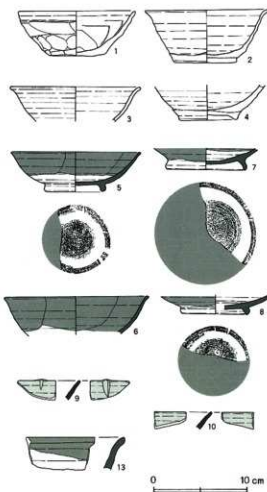
第74図 第27号住居跡・出土遺物(1)



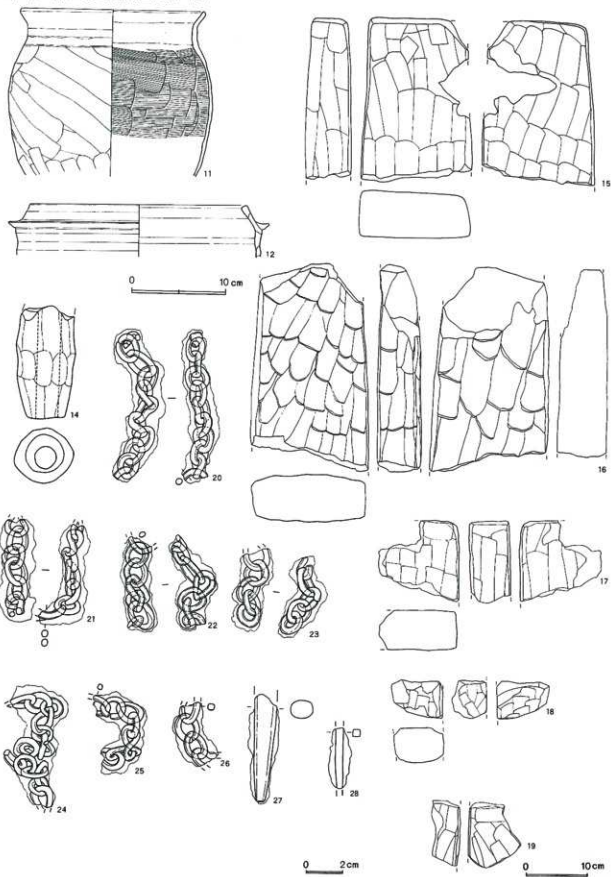
第27号住居跡

- 1 黒褐色土 日輪石土俵
- 2 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を微量含む、白色粒子を多量に含む
- 3 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を微量含む、白色粒子、褐色土ブロックを少量含む
- 4 黒褐色土 焼土粒子、炭化物、褐色土ブロック少量含む 粘性あり
- 5 暗褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを少量含む
- 6 暗褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化物を少量含む
- 7 黒褐色土 炭化物を多量に含む
- 8 黒褐色土 焼土粒子、炭化物、白色粒子を少量含む
- 9 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を微量含む、白色粒子を多量に含む
- 10 暗褐色土 焼土粒子を微量含む
- 11 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む(天井部崩壊土)
- 12 黒褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを含む
- 13 黒褐色土 焼土ブロック、褐色土ブロックを少量含む(扉部)

0 50cm



第75图 第27号住居跡出土遺物 (2)



9は、灰釉陶器の高台付碗である。10・11は、土師器の甕である。12は、灰釉陶器の長頸壺である。9は底部破片、12は底部のみである。10は胴部中位以下、11は胴部上位以下が欠損している。

14は、土錘である。15は、羽口である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第26号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けた。

第27号住居跡（第74図・第75図）

I・J-4グリッドで確認した。周辺は、住居跡の重複が激しかったが、覆土上面に火山灰を確認したため遺構確認は比較的容易であった。

住居跡の形状は、長方形で、規模は長辺4.57m・短辺3.34m・深さ0.37mであった。

主軸方位は、N-101°-Eであった。

カマドは、東壁のはぼ中央に検出できた。左袖は、地山を短く掘り残していた。右袖は、住居跡の壁面をそのまま利用していた。両袖の先端には、川原石を補強材として使用していた。燃焼部は、極めて浅く窪んでいた。燃焼部の奥には、2ヶ所の支脚の抜き取り痕跡を並んで検出した。二つ掛けカマドと考えられる。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅から検出した。形状は、不整楕円形で、規模は長径1.29m・短径0.6m・深さ0.18mであった。

遺構の切り合い関係は、第15号溝よりも古く、第24・25・26号住居跡よりも新しかった。

遺物は、カマド煙道部から須恵器碗(3)が出土し、貯蔵穴内から凝灰岩の切石(15)が出土した。

1は、土師器の坏BⅡである。2は、須恵器(NS)の碗である。3・4は、高台付碗である。3は須恵器(NS)、4は須恵器(HS)である。5から8は、灰釉陶器の高台付碗である。9は輪花碗、10は碗でともに緑釉陶器である。3・6は底部と高台、4・7は口縁部、8は口縁部と底部が欠損している。9・10は、口縁部破片である。

11は、土師器の甕である。12は、須恵器(HS)の羽釜である。13は、灰釉陶器の壺である。11は胴部下

位以下、12は胴部上位以下が欠損している。13は、口縁部破片である。

14は、土錘である。15から19は、凝灰岩の切石である。20から28は、鉄製品である。20から26は鎖、27・28は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第27号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けた。

第28号住居跡（第76図）

D-6グリッドで確認した。周辺は、小穴や土墳などが密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺24.17m・短辺2.59m・深さ0.20mであった。

主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは、検出できなかった。

遺構の切り合い関係は、第105・106号土墳より新しかった。

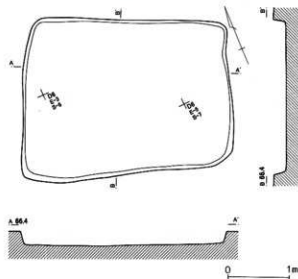
図示できる遺物は出土しなかった。

以上、遺構の重複関係から第28号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

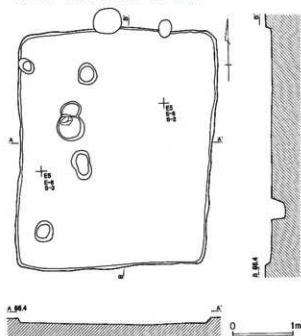
第29号住居跡（第77図）

E-5グリッドで確認した。周辺は小穴や土墳など

第76図 第28号住居跡



第77図 第29号住居跡・出土遺物



の遺構が密集し、確認に手間取った。

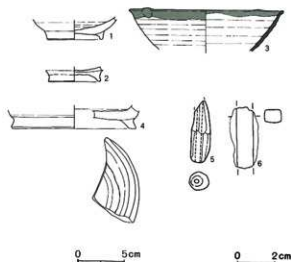
住居跡の形状は長方形で、規模は長辺3.75m・短辺3.05m・深さ0.11mである。住居西半分に小穴が6基検出した。

主軸方位は、N-3°-Eであった。

カマドは、検出できなかった。

遺構の切り合い関係は、第50・60号土壇より古かった。

1は、須恵器（NS）の高台付碗である。2は、須恵器（HS）の高台付碗である。3は、灰粘陶器の高台付輪花碗である。4は、須恵器（NS）の壺の底部である。1・2は、底部のみである。3は、底部と高



台が欠損している。

5は、土錘である。6は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第29号竪穴式住居跡を中壩Ⅶ期に位置付けたい。

第30号住居跡（第78図）

D-6、E-6・7グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇・小穴など遺構が密集し確認に手間取ったが、覆土上面の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は方形で、規模は長辺3.86m・短辺3.47m・深さ0.48mであった。

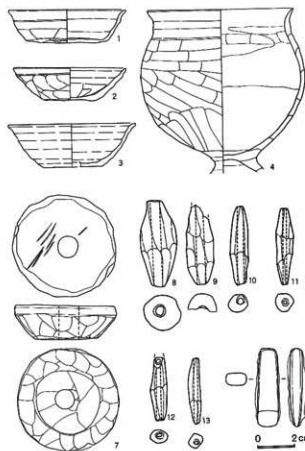
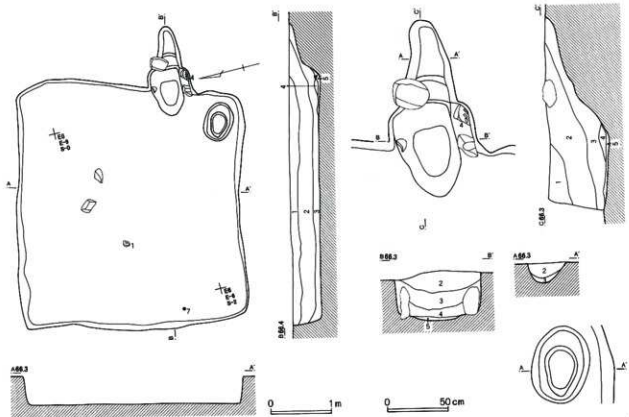
主軸方位は、N-103°-Eであった。

第49表 第29号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	NS				5.6	B, H	良好	R	黒	30	
2	高台付碗	HS				5.4	B, E, H, K	良好	R	淡黄褐	60	粘土板
3	高台付輪花碗	K	16.0				B, D	良好		淡黄褐	10	
4	壺底部	NS				12.9	B, E, H	良好	R	灰	20	

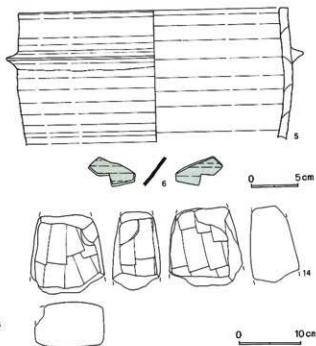
第50表 第29号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
5	浅黄	80		1.1	0.2	2.8	C2	Ic	379	



第30号住居跡

- 1 暗褐色土 目録石を多量に含む
- 2 こげ茶色土 磁土、炭化物、目録石を少量含む
- 3 黒色土 炭化物を多量に含む 粘質あり
- 4 赤褐色土 磁土ブロック主体（天井製磁土）
- 5 暗褐色土 磁土、炭化物を多量に含む（カマド使用時の暗褐色土）



カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。焚き口部の両脇に川原石を補強材として使用していた。本来袖を構築したいと考えられる。燃焼部は、不整形に極く浅く窪んでいた。燃焼部から緩やかな段をもって煙道部へと移行していた。煙道入り口部の天井には、大形の川原石を置いていた。

貯蔵穴は、カマドの右脇南東隅で検出した。形状は楕円形で底面に段があった。規模は、長径0.61m・短径0.48m・深さ0.19mであった。

遺構の切り合い関係は、第31号住居跡より古かった。

遺物は、カマド内から土師器の台付甕(4)が出土した。

1・2は、土師器である。1は坏AⅢ、2は坏BⅠである。3は、須恵器(NS)の椀である。4は、土師器の台付甕である。5は、須恵器(NS)の羽釜である。6は、緑釉陶器の高台付椀である。3は底部、4は台部、5は胴部中位以下が欠損している。6、は体部破片である。

7は、石製の紡錘車である。8から13は、土錘である。14は、凝灰岩の切石である。15は、楔と考えられる。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第30号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第31号住居跡(第79図・第80図・第81図)

E-6グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土塊・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取ったが、覆土上面の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は長方形であった。規模は長辺6.77m・短辺3.99m・深さ0.35mであった。住居跡の北寄りに小穴を1基検出した。住居の規模に比べ小さく、柱穴とは考えにくい。

主軸方位は、N-100°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。焚き口部の両脇に川原石を補強材として使用していた。燃焼部には、掘り込みはみられなかった。燃焼部から大きく段をもって細長い煙道部に移行していた。煙道部の天井には、土師器甕(46・48)を補強材として使用していた。焚き口部の床面には、径40cm、深さ20cmの小穴があり、炭化物が多量に出土した。

遺構の切り合い関係は、第30号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器坏(6)・須恵器高台付椀(30)・土師器甕(49・50)が出土し、南壁際から須恵器坏(18)・須恵器高台付椀(24・32)がまとも出土した。

1から17は、土師器の坏である。1は坏AⅤ、2・

第51表 第30号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏	AⅢ	H	124	3.5	8.4	B, E, F	普通		淡茶	100	
2	坏	BⅠ	H	118	3.4	5.6	B, D, H, K	普通		暗赤褐	40	
3	椀	NS		13.3	4.5	6.1	B, E, I	普通	R	黄灰	40	
4	台付甕		H	15.4			B, D, E	良好		褐	60	カマド
5	瓶	BⅡ	NS	28.6			A, B, C, D, E	良好		外-明褐 内-灰	20	カマド
6	高台付椀		M				B	良好		淡緑	10	

第52表 第30号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
8	にぶい橙	100	4.6	2.0	0.4	11.7	C1	Ia	111	
9	にぶい黄橙	40		1.5		4.6	C1	Ⅷ	112	
10	にぶい橙	100	4.1	1.1	0.3	3.0	C2	Ib	380	
11	橙	100	4.1	1.0	0.2	3.0	C2	Ia	381	
12	黄	90		1.0	0.3	1.7	C2	Ib	382	
13	橙	100	3.5	0.8	0.2	1.3	C3	Ia	636	